銀の剣士は旅をする

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の剣士は旅をする

【Ｎコード】
Ｎ７６７７Ｒ

【作者名】
リード

【あらすじ】
某擬人化漫画の普憫に似ている女の子が友人に連れて来られた会場で目眩を感じたら異世界に移動した。
何故？どうして！？そんな疑問を抱えながら傭兵として働き、“天を射る矢”に所属し始めました。
そして、彼女が異世界に来て四年後、運命の鐘が鳴り始める。
更新速度は波が激しいです。

主人公設定（前書き）

取り合えず、ちょくちょく追加されていると思います。

主人公設定

名前：ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット
綴り：Ｇｉｌｂｅｒｔｉｎａ・Ｎｏａｈ・Ｂｅｉｌｓｃｈｍｉｄｔ
偽名：ギルベルト・バイルシュミット
年齢：１６歳（原作四年前現在）　身長：１６９？　（以下同）
性格：ギルベルティーナの時とギルベルトの時の性格が違う。二重人格と言うわけではないが「ＴＰＯに応じてペルソナ（外的側面）を替えている」と言った感じ。
基本的に意外と根は生真面目で面倒見がいい、ルールなどに厳格。
真面目な頑固者。
キレたら皆がドン引きするほどのドＳ。サディスティク星の女王様。
口調はギルベルティーナの方が大人しく、ギルベルトの時の方がやや悪い。
異世界にいきなり飛ばされた為に実はガタガタな精神状態。
表に出さずにため込む一方だが、表面がフランクな為に気付かれない。
演技力がある。仕事の鬼。
髪：色素がほとんどなく銀。いわゆるプラチナブロンド。白金色とも言う。
瞳：透明度の高い淡い青。
容姿：先天的に色素が薄い為に真っ白い。硬質な感じに整っている。可愛いよりカッコいい、カッコいいより綺麗。そんな顔立ち。
すらっとしておりスマート。腰の位置が高く足が長い。
そして、実は隠れ巨乳。
クラス：魔剣士
趣味：菓子作り、楽器演奏、歌を歌う事
特技：炊事洗濯等の家事仕事、即興演奏

好きな物：ヴルスト、クーヘン、わんこ
嫌いな物：イニシャルＧのとある虫
メイン武器：バスタードソード　（両手半剣）
サブ武器：足（ＴＯＳのリーガル的な感じ）
備考：アスピオ出身のリタの親戚ということになっているが実際は異世界の人間。
ギペルという名の老兵に鍛えられ、素人以上の腕前を持つ。
魔術は気持ち悪いくらいの精密さでピンポイント爆撃をおこせる。
テルカ・リュミレースに来てから色々仕込まれて色々やってるせいで気付かれにくいのだが元の世界にいた時よりも身体能力が格段に上がっている。本人は重力の問題じゃねえの？と考えている。
アルビノほど色素が抜けている訳ではないが、髪と肌の色素が殆ど無い（日の光や人口の明りに体が過剰反応を起こすほどではないが普通の人よりも色素が格段に少ない）ために日の光が苦手（正確には長時間日に当たり続けるのが）。

名前のＧｉｌｂｅｒｔ（ギルベルト）、これが女性系に変化してＧｉｌｂｅｒｔｉｎａ（ーナ）（ギルベルティ）
古代ドイツ語人名のＧｉｓｉｌｂｅｒｔに由来する。
ｇｉｓｉｌ＝ｐｌｅｄｇｅ（誓い・盟約）、ｂｅｒｔ＝ｂｒｉｇｈｔ（明るい・輝く）もしくはｆａｍｏｕｓ（有名な）。
「輝ける誓い」とか「有名な盟約」とか訳せばこんな感じで素敵。
名字のＢｅｉｌｓｃｈｍｉｄｔ（バイルシュミット）
語意はＢｅｉｌ＝斧、Ｓｃｈｍｉｄｔ＝鍛冶屋。
武器鍛冶師とか武器職人みたいなそんな感じ

一話　目眩に襲われ異世界へ（前書き）

若干不憫な少女の話を書こうと思います。
更新は不定期気味になるかもしれません。

誤字脱字などありましたら報告をお願いします。

一話　目眩に襲われ異世界へ

神様なんていたら不敬だと言われようともぶっ殺す。
少なくとも一撃喰らわせてやる。

そう、心に刻み込んだ何カ月か前の出来事。
私、父の影響もあって神様の事信じてたんだけどこれって酷くない？
でも、母の影響もあって多神教も全然ＯＫだからなぁ・・・。
勤勉な信者ではないからかな。うん。

それにしても此処に落ちてよかった、と思う。

だって、此処安全だし。
リタに聞いた騎士団とか貴族街に落っこちてたら終わってた。

青春を謳歌できない運命、というか人生？
そんなのごめんだ。

私はギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット。
ミドルネームのノアは感じで書くと乃愛だから、そこんところ宜しく。
独日ハーフの元某府某市の私立女子高生。
現在は、アスピオのリタ・モルディオ宅に居候中。

普通可笑しいよね、異世界にワープなんて。
ありえないよね！！

それなのに私は某府某区某市で行われたコミケ＆コスプレ会場で目

眩をおこしたと思ったら、メルヘンかつファンタスティクな世界に落っこちた。

今までいた世界から、ファンタジーだけど現実（リアル）な世界に。

私は先天的に色素薄くて銀髪青眼。確かに珍しい色合いだけどそれだけだよ。

ドイツ人と日本人のハーフだけど、日本在住の普通の高校一年生だぞ！？

影で暗躍したり、チームを率いてたりしていないからね！？

空手は習ってたけど（国際的に武術としての地位が高いんです）、それ以外は音楽が上手いくらいだよ。

主人公気質なタイプじゃないからな！！

どちらかというと主人公の友人Eぐらいのポジションだから！！

それなのに、何故こんな目に・・・・。

僅かに潤んでくるこの目は気のせいだ。

現実逃避したのは何カ月か前の話。

落っこちた先のアスピオのリタの家に、何とか置いてもらえることになって文字の勉強とか魔術の勉強（この世界には魔法があった！ありえない！！）しつつ、家事をしていたのに、私が来たせいで生活に少し困っているリタの姿を見て、一念発起。

年下の女の子にお金たかるとかヒモよりたちが悪い！！

なぜか、この世界に来て身体能力が格段に上昇してたので（仮説と

して重力の負荷があげられる）、元傭兵だったギペル爺に三日三晩かけてほぼ泣き落としに近い形でしぶしぶ許しを貰い、弟子入りしました。
そしたら、鬼か何かのように傭兵として戦い方を仕込まれました。

ギペル師匠、超怖い。
容赦ない。鬼上官にしか見えない。
背後（バック）に鬼が見える。
師匠の剣で何度か死にかけました。
右側、眼帯なのに死角なしって可笑しいよね！？誰かそうだと言ってくれ！！

そのおかげで、まぁ結界の外に出てもそう簡単には死なないだろっというお墨付きをもらうくらいには成長し、それをリタに報告するとなんだか複雑そうな目で見られました。

そんな目で見られても働かないとご飯が食べれない。
暮らしていけないのは事実なので、しぶしぶ承諾してくれました。

ただし、条件をつけられました。
それは、傭兵とかそういう仕事するなら男のふりをすること所謂男装をして、だそうで・・・。

なんで？って聞いたら、女の一人で傭兵なんて危ないでしょうが！！と叱られた。
年齢は私の方が上なのにリタの方がしっかりしてる。
ギペル師匠にもそうしろと言われたので、結局男装です。
最初に落ちて来た時に来てた某国擬人化の一人楽しすぎるぜ！！な国の公国時の服装。
所謂、僧衣っぽいシルエットが分かりにくいひらっとした感じの服

装です。

身長高いし、声も低めなので、胸を潰して身体のラインをどうにかしてたら、あら不思議。

鏡に映っていたのは銀の髪に鋭い目をした青年でした。

まんま、あいつじゃないか、とへこんだ私がいたのは内緒です。

男装名はギルベルト・バイルシュミットと名づけられました。

リタに・・・・。

私の名前、ギルベルティーナの男性名だからという理由だからだそうですけど、それはそれでへこみます。知らないはずなのに何で！！と驚愕したのは此処だけの話です。

私は、普憫じゃないからなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「！！」

目が覚める。

どうやら夢を見ていたらしい。

壁にもたれかかっていた身体を伸ばす。

バキベキゴキと身体にありえない音がでた。

軽いストレッチをしてから剣を腰に帯びる。

外套を肩に引っ掛け、立ち上がる。

と、ドアの陰から

「ギルベルト」

紅茶色の目をしたカウフマンに声をかけられる。

「今日で契約は終わりだ。報酬を」

「・・・やっぱり、私のギルドに入る気はない？」

「悪ぃな。・・・今の所ギルドに興味がねえんだ」

そう、口角をあげて告げる。

「そう、残念だわ。名が上がり始めてる僧衣の騎士を雇えないんて」

「“僧衣の騎士”？」

「あら、貴方が知らないなんて、ね。貴方の異名よ、ギルベルト・バイルシュミット。ふらりと現れ助けてくれる銀髪の剣士。・・・結構な都市で流れてるわよ」

「馬鹿か、俺はそんなんじゃねぇよ」

ケセセと苦笑いしながら告げる。

「貴方はそう思ってるけど、そうじゃない人達もいるってことよ」

カウフマンの脇を通り抜ける。

カウフマンも苦い顔だ。

「知らねぇよ。俺は俺の思うがままに生きるだけだ」

「まぁ、これは忠告。貴方が極悪人を捕まえ歩いてるせいで騎士団の貴族が動いてるらしいわ」

「何でまた？」

「面子をつぶされたから、だそうよ」

めんどくさいな。

ひらっと手をあげる。

「ご忠告ありがとうよ」

開け放った扉からは陽光と風が吹き込んでくる。
それに目を細めながら、外への道を踏み出した。

異世界からやってきた少女ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット、もとい、傭兵ギルベルト・バイルシュミットの非日常はこうやって送られていくのである。

一話　目眩に襲われ異世界へ（後書き）

名前にツッコミはよしてください。
うたれ弱いので・・・。

あと、ご気軽に感想やコメントしてくれると嬉しいです！！

二話　少女から見た彼女（前書き）

リタの口調がちょっと違うかもしれません。
変だったらお手数かもしれませんがちょっと教えてくださいお願いします。

二話　少女から見た彼女

目の前にいるのは銀の髪をした端正な顔立ちの青年。

に見える整った顔立ちの女。

自分で言っておきながらあれだけど、ここまで化けるとは思わなかった。

胸を隠すためにさらしをきつく巻いて、体型をごまかすために布で巻いたり、服装だって大き目の男ものを着ていると鋭い目つきの端正な顔立ちの美青年にしか見えない。

加えて、性格はがらっと、声色は少し低めに仕上げるのだから恐れ入る。

滅多にいない銀の髪に恐ろしく整った顔、結構真面目な性格、あのギペルじいさんについていける剣の腕も相まってアスピオの若い子にファンクラブができたと話したら、引き攣った顔をしてた。

あー、あんた、そういうの苦手そうだものね。と言ったら。

だったら止めるように説得してくれと頼まれた。

いや、だって怖いわよ。あの空間と言ったら。

肩を落として、もう、いいや。何食いたい？と尋ねられた。

もう、気にしないことを決めたらしい。というよりも、今は気にしたくないの間違いかしら？

そうして、台所に歩いて行ったギルの後姿を見ながら、過去に思いを馳せた。

昔の事を考えるとこうしてギルが台所で料理したり、暮らしているのは信じられないことだと思う。第一印象は何て言うか凄かったの一言でしか表わせないから・・・。

そもそも最初にあったのは神様のいたずらとしか言えない。むしろ、双方にとって絶対にありえないことの類だっただろう。なんせ、異世界の人間、神様を信じていないあたし、向こうも知らない場所に一瞬で移動したことに呆けてた。

大体、あたしが異世界とか違う文化圏から来たという、そんな荒唐無稽な話を信じたのは、ギルが持ってた鞄に入っていた“けーたい”やら“ウォークマン”とやらを見せられたからだ。

テルカ・リュミレースではまだ有り得ない資源と技術を使ってできた携帯できる機械。それはオーバーテクノロジーに値する代物で、今の技術、科学では作れないものだった。

ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミットと名乗ったそいつ。ドイツのバイエルンと呼ばれる地方で生まれ、１３歳からニホンと言う島国で育ったという１６歳の学生。行くあてがないと言ったその横顔を見て、聞いてしまったあたしはそいつを家に引き取った。

断じてほだされたとかじゃない。ただ、持ってる機材に興味があっ

たからそれだけ。
だった、・・・最初は。

一緒に暮らし始めて、温かくておいしい料理を作ってくれて、部屋は凄く綺麗に整頓されていて、こういうのが家族っていうのかなぁと思ったり。そんなこと思いながら、お返しに文字を教えてあげたり、魔術の理を話してあげると子供のように喜んだ。魔法なんて私の世界にはない、と目を輝かせて私を質問攻めにしてきたのも覚えている。

そうして何週間か暮らしているうちに、あたしが家計で悩んでいたのを知って、ギルが武器を取る道を選んだのも知っている。細くて白かった綺麗な手も武器を持つようになって、豆を何度もつぶし、前よりも無骨になったのも知っている。辛い時なのにいつも笑って笑顔で隠して本心をなかなか見せない。

年下の子にずっと頼りっぱなしってのは、ね。と笑ってたけど、それだけであんなに頑張れるものなのか。表向きは帰る方法を探すためらしい。ありえない、稼いだお金はほとんど家に入れてる癖に。

馬鹿じゃない？

そう、思ってたのに、気づいたら心の中に入り込んでいて、笑顔をくれた、頭をなでてくれた、欲しかった言葉をくれた。

元傭兵のギペルじいさんに魔導器（ブラスティア）を貰って、魔術を行使して、危険な傭兵の世界に突っ込んでいった。

・・・今ならあたしとあんた。二人分くらいなら賄えるのに。

そこまで、思った所で声をかけられる。

「・・・リタ。お皿出して、ご飯で来たから」

「ん、分かった」

それでも、世界は回ってて、あたしとギルの時計の秒針が進むのである。

「・・・いただきます」

「おう、温かい内に食べなさいよ。いただきます」

二話　少女から見た彼女（後書き）

リタって、ほぼ一人で生活してきたわけだから根本的には家族愛的なものに飢えてそう。誰かがずっと一緒にいてくれた訳じゃないから一緒にいたらどうしたらいいか分からないとかもありそう・・・。

ギルとリタ。完璧にではないけど多少は打ち解けてきた頃の話。ぎこちなく、見てる方がはらはらしながら見守るような義家族関係。

あと、リタがギルの前で本を読みながら物を食べないのは、ギルが怒って凄いことになったからです。

三話　師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫（前書き）

師匠と弟子の話。
なのに、完璧に爺と孫の話になってる。
オリジナル路線を突っ走る話になりそうです。

三話　師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫

最初は、気まぐれだった。
理由は昔の自分に似ていたから。
それだけの理由と自分の気まぐれでこいつに剣を教え込んだ。

それにしても、見れば見るほどあの人にそっくりだ。

少し癖のある銀色の髪も意思の強そうな鋭い目元も、唯一違うのは目の色だけ。
この餓鬼は透き通るような薄い青色だが、あの人はこの世のものとは思えないぐらい綺麗な紅色だった。

はっとするほど白い肌と硬質な顔立ち。整っているが故に恐ろしく冷たく見える容姿もそっくり。

でも、性別が違う。
あの人は男でこいつは女。

武器を持ったことのない人間。
あの人は俺に剣を教えてくれた人間。

それに、あの事件の後から俺はもう、剣を持つことはないと誓っていた。

でも、懸命に俺に頭を下げてくるこいつの姿が昔、あの人に教えを請うた若き日の自分の姿に重なった。
――――――ただ、それだけだった。

それなのに、こうも入れ込み自分の技を心を剣を教え込んでもいいと思える人間に出会えるとは。
長い人生を生きている自分だからこそ、この出会いは運命だったと言いきれる。
時々出会うこんな愉快な餓鬼達がいるからこそ人生は素晴らしく愉快だ！！

ガィイン！！

剣と剣が合わさり刀身を削り、火花が散る。

何度か交錯しただけなのに腕がしびれることに舌打ちをする。

（馬鹿力が、あの細腕にどんな力が加わってるってんだ！！畜生が！！）

クルリと切っ先を回し迫ってくる剣を避け、拳を鳩尾に叩き込む。

ヒュッと息を飲む音が、やけにはっきりと聞こえた。

「っあぁぁぁぁ！！」

固まった身体を間髪いれずに地面に叩きつけ、起き上がろうとする餓鬼の首筋に剣を添える。

「まだまだだなギルベルティーナ」

「・・・ギペル師匠（せんせい）」

息を乱しながら地面にぶっ倒れてる弟子に手を貸す。
上体を起こしながらぼやく弟子の声を聞いた。

「容赦ないですよね・・・」

「手加減してもらいたいのか？」

そうからかうように笑うと、眉間に皺を刻みながら、ぽつりと落とすように

「それは、嫌です」

不機嫌ここに極まりみたいな顔をしてぼやいた。
それに吹き出しそうになりながら言葉を紡ぐ。

「だろうな」

そして不機嫌そうにぼやく弟子の髪をなでる。
クシャリとした音のなるその銀の髪は見かけよりも柔らかく艶やかだ。

ぺしりとよわよわしい力ではたき落とされる。

「あー、もう！！こんなにぐしゃぐしゃにしないで下さいよ！！」

すいっと手櫛で直しながら、零す弟子。

わざとぶっきらぼうに告げるその言葉が照れ隠しだと気付けたのは若かったころの自分にも通ずるものがあったからだろうか。

くくっと喉の奥で笑いながら、もう一つしかない目を細める。
それを見た弟子が顔を歪めたのが見えた。
「・・・その、笑い方止めてくれません」
心底不愉快です。と苦々しく零す弟子。
ますます、昔の自分に重なってにやりと笑う。
「いーやーだ」
にやにや笑いながら告げる俺にイラッとしたのか、顔をうっすら赤くして、言葉を荒げる。
「ああ、もう！！貴方は餓鬼ですか！？少なくとも私よりも年上の癖に！！」
大人びてる綺麗な容姿の女が珍しく年相応の対応をするとこんなにも可愛らしく見えるのかとなんとなしにほわりとする。
キー、キー困ったように喚く声も小動物、特に子猫のように聞こえるから不思議なものだ。
「あー、もう可愛いな畜生！！」
ガシッと頭を抱え込む（ヘッドロックか？）ように、頭を固定するとガシガシと頭を撫でる。

「にゃー！？」

ぎょっとしたように逃げようとする。弟子を抱え込みさらに撫でる。

あーもう、何だろうこの心地。

多分、俺に孫がいたらこんな感じなんだろうなと思いつつ。

思いっきり可愛がる。

ぜーぜーと息を乱すこいつを見て、孫がいたらこんな感じなんだろうなぁと思った今日この頃。

三話　師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫（後書き）

もうちょいしたら、旅に出させてとあるキャラに逢わせたいです。
リタしか原作キャラが出ていないという恐怖・・・！

ついでに、恐ろしい修行。超スパルタなのに弱音を吐かないのは、
主人公の意地と矜持が高いことと、恐ろしいとか辛いと思う感情、
感覚が鈍く麻痺しているからです。

あと師匠ことギペル様の紹介。
ギペル・クロイツヴェーグ
隻眼の元傭兵。昔はドンやアイフリードと鎬をけずりあったことも
ある人物。
老人だから白髪。目の色は灰銀。老いても整っているキツメの顔立
ち。
超強い。というよりも鬼。訓練、もとい修行はもっと容赦なくて鬼。

とりあえず、こんな感じで・・・。

これからも応援よろしくお願いします！！

四話　あるへこんだ日の話（前書き）

凄い久しぶりに投稿しました。
これからも頑張ります。

血の表現が出てきます。

四話　あるへこんだ日の話

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

日常の境界線を越えてしまった少女は帰り道がわからない。

――――――いや、もうそれが分かったところで帰らないだろう。

だって、私は見つけてしまった。

自分を姉として慕ってくれる稚い少女を、自身をなんだかんだで見てくれる師匠を、異世界の人間を自分の身内だと認識してしまった。

あの人達の所へ帰りたいと思うようになった。

そこまで、考えた所で向かってきたモンスターを叩き斬る。

ザシュと肉を斬る嫌な音と、それから一拍遅れて斬ったモンスターからはまだ生暖かい血が噴出す。

てん、てんと剣から垂れる滴をぼんやりと見つめた。

この感触が嫌いか？と問われれば嫌いだと答えよう。

しかし、この感触に慣れたか？と問われればとうの昔に、としか答えられないだろう。

鋭く剣が肉を斬ることにも、剣と剣を合わせることで起こる剣戟の音も、倒したモンスターや動物の毛皮や牙を剥ぎ取り売ることも、肉を解体し、肉を捌き料理することにも、慣れてしまった。

これでは、主人公の友人Eのポジションとはとてもじゃないけれど言えない。
非日常が日常になってしまった。

フッと歪んだ唇から洩れるのは歪んだ笑い。
自分がいた世界の常識との差異に、目眩がした。

しかし、私はそれでも、選んだのだ。
この世界と元の世界を天秤にかけて、選んだ。
親不孝者と罵られてもしょうがない事をした。
そんな子供は帰れるわけがない。

「・・・しかし、人間離れしていくな」

そのうち、この感触を気持ち悪いと思わずに慣れてしまう時がくるんだろうか？
それは、・・・凄い、いやだ。
過去の自分が自分では亡くなるようで凄い嫌だ。

ひとつ溜息を落して、髪をかきあげる。
これで、今回の魔物討伐の仕事は終わりだ。
一呼吸して、自分の中のスイッチを入れ替える。
そして剣の血を払いカチッと鞘に納めた。

此処の世界に来て、伸ばして長くなった髪が風に揺れる。
見上げた空は、故郷の空の色にそっくりで泣きそうになる位綺麗だった。

「さぁて、帰ろう」

報酬は、結構多かった。
アスピオのリタには本を、師匠にはお酒でも帝都で買って帰ろう。
この世界で、自分の帰る場所があるのだから、待っていてくれる人がいるのだから。
異世界に落ちた自分にも守るべきものがあるのだから。

ＳＩＤＥ：デューク

焚火の炎に照らされて、うっすらと橙色に染まるまだ幼い少女。
初めて会った時は、正直少年かと思った。
異郷の空気を纏った不思議な雰囲気を帯びていた、あやふやな容貌を持った少女。

冷たい印象を与える切れ長のアイスブルーの瞳。
綺麗だが見る者を斬りつけるかのような真っ直ぐな眼差し。
私と同じ銀の髪は白金の硬質な輝きを放っている。肌も雪の様に白い。
色素の薄く硬質に整った顔は雪像の様で酷く冷たく見える。
細いが鍛えられている事が分かる体躯に、体型を隠す様な服装。
首元も隠していた。

中性的な顔をしているからしょうがないと笑っていたが申し訳なく思った。
それが初めて会った時の話だ。

引き合わせたのはクロイツヴェーグ。
ギルベルティーナはクロイツヴェーグの孫で、あいつの剣を受け継

いだ剣士。
私にあった時に驚いた顔をしたから初耳だったのだろう。
あの男も無茶をする。

クロイツヴェーグは随分昔の友人だ。
エルシフルを通じて友人になった。それが最初。気難しいところもある偏屈な友人だ。

それにしても、引き合わされた時に、孫と言った子供の弟子にあわされたのには驚いた。
剣を捨てたと話していたのに剣を持っていたのにも驚いたが・・・・
あの生きた瞳は人魔戦争の前しか見た時が無い。

まぁ、あの気難しい友人が弟子にするのも無理はないと思う。
この沈黙を保ってられる気質は好ましい。
一を聞いて十を知り、空気や心境を読み取る人間だ。
あの友人と相性がいいのも頷ける。

焚火の炎が音を立てた。
それを伏し目がちに見つめる少女は、やはりどこか異郷の雰囲気を携えていた。

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

ホーホーとどこかで梟が啼いている。
夜の帳は既に落ちて、痛いほどに静かな空気が場を支配している。

こんな夜は、嫌いではない。

特に色々考えこんでしまった日なんかは、静かに過ごしたい夜だってある・・・。
例え、師匠の友人。私の知人がいても構わない。
デュークさんはこういう時に察してくれる人だし、元々静かな人だ。
感情に聡い稀有な性質を持つ人。
へこんでいて静かな夜が欲しい、その癖、人がいてくれたらなんて思う私は欲張りだ。
こういう時に黙っていてくれるこの人を好ましく思う。

パチンっと薪(たきぎ)が音を立てて爆ぜる。
橙色の光を帯びて焔は燃える。

それに照らされるデュークさんの横顔は綺麗だった。
師匠の話だとここ十年彼は歳を取っていないらしい。なにそれこわい。
こう、人ではない美しさという表現があう男の人だ。

頃合いを見計らって焚火にかけていた鍋を匙でぐるりとかき混ぜる、すると湯気と一緒に美味しそうな匂いがほわりと立ち上った。

今作っているのは、シチュー。農村の報酬で貰ったお金と、材料で作ったモノ。
旅をしてるからなかなか持ち運べない牛乳と生クリームをベースにホワイトソースを作り、鍋に放り込んだ。中に多めのじゃがいもに玉ねぎ、人参、キャベツにマッシュルーム、鶏肉を入れた。

とろみもちょうどいいシチューの状態を見て、器にシチューをそそぐ。
匙と一緒に器を手渡してから、宿の女将さんに焼いてもらった丸パ

ンを二つ取り出した。
デュークさんに一つ、私に一つ。
浸して食べるようだ。
いただきます。そう呟いてから、
シチューを一掬いして食べる。
うん、上出来。
デュークさんは何も言わないけど、文句も言わないのでそれはそれでよし。
不味くは無いし、取り合えず口には合うようだ。
いつかはこの人に美味しいと言わせてみせる。
・・・この人、綺麗に食べてくれるんだけど、いや、それは作り手として嬉しいんだけど、感想なんてほぼしないからな・・・
なんか、作り手としての敗北感が・・・
まぁ、それは今は置いといていい。
へこんで人寂しい癖に、静かじゃないと駄目。
そんな我が儘な私の調子が狂っている事に気付いているのに何も聞かずに、傍にいてくれる。
分かりにくい優しさをくれる。
こんな人が傍にいてくれるならば、こんな夜も悪くない。

四話　あるへこんだ日の話（後書き）

デュークさん視点むずい・・・！！
まぁ、多分、時間軸的には矛盾していないはず。
これからもがんばります。

五話　下町の少年（前書き）

ＴＯＶの世界では英語は富裕層の教養として存在するっという設定（この小説の中で）があります。
ご了承ください！！

五話　下町の少年

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

何日か一緒に過ごしたデュークさんと帝都の側で分かれた後。

私は帝都の門をくぐり、空を見上げた。

故郷の空と同じ色をした青い空。

透き通るようなスカイブルーに染め上げられている、空。

帝都のザーファイスの町並みはドイツの旧市街や故郷のバイエルンを思い出させる。

ビル並みの大きさの城だって、山の上にあるドイツの古城にそっくりだ。

しかし、此処はいくらドイツに似ててもヨーロッパでもなく、それどころか地球ですら無いのだ。

ありえないことに。

決定的に違うのは空を覆う四重の光。

皇帝の城から伸びる剣の頂上付近に冠の様に君臨する光の文様。

結界魔導器（シルトブラスティア）と呼ばれる物。

異世界から来た人間に言わせれば摩訶不思議な代物だ。

何も知らないでそんな便利なものを使ってるって怖くないか…？

簡潔に理論をまとめて説明した後に安全性について討論させろって感じ。

……それにしても、

「でっけー……」

思わず感嘆した。
素直に凄いと思う。
こんなのドイツでも日本でも見たこと無い。

男口調なのはご愛嬌。
今の私、いや俺は“僧衣(そうい)の騎士(きし)”の異名をとる傭兵。
ギルベルト・バイルシュミット。なのだから。

黒革の手袋で覆った手で顔をひと撫でする。スイッチを切り替える
為に、触れる。
そこにいるのはギルベルティーナ・ノア・バイルシュミットではな
くギルベルト・バイルシュミットだ。
黒い僧衣に、剣を携えた傭兵。

大胆不敵で唯我独尊な、それでいて実は面倒見のいい人間の性格の
仮面を被る。
スイッチを完璧に切り替える。

耳に甲高い声を感じ取り、ひょいっと路地裏に飛び込む。
微かな声を頼りに坂を下ったり、道を変えたりしながら、進む。

街のすみの辺りに移動すると、声の主だろう小さな少年と年老いた
男性。
それを取り囲む三人の騎士団員。
思いっきり、騎士が悪もんだな。これは。
この世界に来てからどうやら感覚が鈍っているらしい。

昔なら時代錯誤にしか思わないものを本物だとしっかり認識した。
呆れたように、騎士を眺めた。
やたらと偉そうな騎士が一人いる。
きっと一番、地位が高いか血筋が上なんだろう。
子供に何事か言い返されて頭に血がのぼったのか、剣を抜いた。
流石に取り巻きの騎士も不味いと思ったのか止めようとする。
しかし、間に合いそうにない。

とっさに子供と騎士の間に入り、剣を抜いて受け止める。

鋼と鋼が合わさって、耳障りな音を立てた。

目を見開く老人と子供。
顔を歪める騎士。

それを視界に納めて、ケセセと笑った。

手首を返して、剣をはじき返す。

肩につかないぎりぎりにまで伸ばした髪と、黒の僧衣がふわりと舞った。

ＳＩＤＥ：テッド

今、俺の目の前では真っ白な人がご飯を食べている。

椅子の脇に剣を立てかけて、綺麗な手付きで、デンっと大きく盛られた料理に少し困ったような顔をして、それでも文句を言わずに綺麗に残さずにきちんと食べている。

俺とハンクス爺を助けてくれた銀の髪をした人は、ギルベルト・バイルシュミットという。

騎士の様な人だが騎士ではなく傭兵で。
ザーファイスには妹への贈り物を買いに来たそうだ。

……なんというか、ねぇ。

意外とこの人、繊細っぽい。
大雑把そうに見えて、細かい所とか気にしてそうだ。

「ん、どうしたテッド。俺の顔になんかついてるか？」

「ううん、なんでもないよ！！」

「そうか…。それにしても、このポトフ美味しいな」

黙々と食べていたギルベルトさんだけど箒星の女将さんが作った料理は美味しいと思ってたみたいだ。うっすらと顔を綻ばせるギルさんに、女将さんやハンクスさん、それに僕以外の食堂の人が溜息をついた。

ギルさんはあまり自覚してないみたいだけど凄い綺麗だ。
・・・男の人に綺麗っていうのもなんかおかしいような気がするけど綺麗なのだ。

艶やかで手触りもいい、素晴らしい白銀（プラチナブロンド）の髪。
それに近い淡い金色の髪なら子供に見かけなくもないけど、大人になっても淡い髪の色、しかも金で無く銀色なのは珍しい。だいたい

は大人になるにつれて色が濃くなっていくから。
それにギルベルトさんは髪だけではなく、肌や瞳の色も白くて淡い。
肌は肌理細かく、ほんのりと光を零すような艶がある。
整った顔立ちとも相まって、どこか人形めいても見える。
立ってるだけでお金が取れそう、とひっそり思った。

「ねえ、ギルベルトさん」

「なんだよ、テッド？」

「なんでギルベルトさんは傭兵になったの？」

ギルベルトさんは少し考え事をするかの様に間を置いた後、悪戯っぽくキラリと瞳を光らせてから、口を開いた。

「…Ａ　ｓｅｃｒｅｔ　ｍａｋｅｓ　ａ　ｍａｎ　ｍａｎ．（秘密だ。なぜなら、その方がカッコイイから）」

「え？」

この人、わざと分かんないようにいってる！！
英語なんて、相当教育を積んでなきゃわかんないよ！
僕がムスッと膨れると、ギルベルトさんはくくくと喉の奥で笑った。
僕らを見てた皆も穏やかな会話を繰り広げている。
だけど、そんな穏やかな空気は乱暴に入って来た騎士たちに壊された。
乱暴に蹴り破られたドアは、蝶番が外れかけている。

貴族であろう騎士たちはギルベルトさんに剣を向けた。

ＳＩＤＥ：騎士Ｄ

「ギルベルト・バイルシュミットだな」

「ああ」

上官が銀の髪をした痩身の剣士にそう言葉を投げかけている。
銀の剣士はうっとうしそうに俺達を見据えてきた。

「公務執行妨害の容疑でお前を連行する！！」

そう、偉そうに上官が言うと

「――――ついでに従わなかった場合は？」

こともなげに言ってのけた。
アイスブルーの瞳はだんだんとその冷たさを増していっている。
そんな危険な事に気付かないまま上官は言葉をつづけた。

「お前が庇ったとかいう、子供と老人が牢に入れられるだけだ」

空気が凍りついた。冷えるとかいう表現ですらない。
もう、アイスブルーの瞳には熱の片鱗さえ見せない冷たさだけが支配している。
喉がごくりとなった。
宿に居る下町の住人や隣の同僚でさえも気付いているのに上官だけが気付いていない。

「……　　！！」

何事が声を発した後、その剣士は側に居た子供に向き直った。

「テッド・・・」

「何、ギルベルトさん？」

「俺の荷物と剣を預かっていてくれ、…あんたらに迷惑をかけるわけにはいかないから」

後者の言葉を宿の女将と代表者であろう老人に投げかける。

そして、上官と俺達に向き直った。

「――――行くんなら、早くしてくんないか？」

それはありったけの嫌みを籠めた言葉だった。

五話　下町の少年（後書き）

次回は、騎士の誰かに会わせたいです。
これからも頑張ります。

六話　牢の中で見た夢（前書き）

牢屋に放り込まれて、いつの間にか見た夢。
・・・主人公は現代人で高校生だったので、引きずってることも色々あるんですよ。

六話　牢の中で見た夢

いつの間にか黒い空間に立っていた。
その時点で違和感なく、「ああ、これは夢だ……」と理解する。
自身がこれに気付いた時点でくるくると姿かたちの変わる空間。
眼前に過去の記憶のかけらのようなものが浮かんでは消え。浮かんでは消える。

まるで、あれだ。
――――走馬灯じゃねぇか。
思わず脳内（夢の中で脳内もあったものじゃないとは思うけど）で突っ込んだ。

家族や、友達や、学校の先生やクラスメートの顔がふよりと消えては現れる。
少し前なら、当たり前だった光景。
当たり前のように享受できていた日常。

もう、諦めていた。
そのはずなのに、ぽたぽたと頬に涙が落ちてきた。
帰れない、大切な所。

帰れる方法もあるはずだと考えていた考えは来てすぐに打ち砕かれた。

この世界には、魔法がある。
しかし、物質移動系の魔法は、太源がそもそも存在しない。
魔法という学問としての根っこの部分が存在しないのだから。

葉っぱや花、実の部分である理論や理屈や設計図、魔導書のようなものはない。
そもそも、自分がこの分野において研究をし、理論や定理を発見したとしても。
おそらくその理論は物質移動についてだ。

物体と肉体は違う。
生きているのと生きていないのでは色々違う。
（負荷のかかりぐあいだとか破損した時の対処だとか、つーか肉体なんてへたすりゃひき肉だ）。
それを頭の中で理解した瞬間、帰るのは不可能だと理解した。

しかも、この世界（テルカ＝ミュレース）とあちらの世界（地球）と次元が違う。
魔法なんてファンタジーなもの存在しなかった。
呪文を唱えて火の玉発射とか歩く人間型火炎放射機じゃねぇか。
ねーよ。マジでねーよ。
理論と理屈と定理を説明しろ。

「・・・帰りたい」

ついにとうとう、本音が。
押し込めて、気にしない様に、思わないようにした、言葉が漏れた。

「・・・Ｍ（母さん）ｕｔｔｅｒ、Ｖ（父さん）ａｔｅｒ――――Ｆ（フリッツ）ｒｉｔｚ」

瞼を乱暴に拭う。
はらはらと、雫が落ちて逝く。

「・・・Ｉｃｈ（家に、）　ｍ？ｃｈｔｅ　ｎａｃｈ（帰りたい）　Ｈａｕｓｅ．」

「落人(おちうど)・・・」

「Wer(お前) bist(は、) du(誰だ)!」

声のする方向を見た。

そこには狐の様な尾を持った、ナニカがいた。

六話　牢の中で見た夢（後書き）

次回も頑張ります！

七話　解放された（前書き）

上手く騎士団の面子が掴めていないような気がします。

七話　解放された

ＳＩＤＥ：アレクセイ

記された名前はＧｉｌｂｅｒｔ（ギルベルト）・Ｂｅｉｌｓｃｈｍｉｄｔ（バイルシュミット）とＧｉｌｂｅｒｔｉｎａ（ベルティーナ）・Ｎｏａｈ（ノア）・Ｂｅｉｌｓｃｈｍｉｄｔ（バイルシュミット）の二つ。
同一人物の名前だ。

尽忠報国の騎士ドレイク・ドロップワートの好敵手（ライバル）ギペル・クロイツウェーグの孫にして、アスピオの天才の家族。後ろ盾には、メイベリー家当主の三姉妹も加わる。
手の出しがたい、傭兵だ。

彼女は女性だが、一人旅の上に身よりも少ないので男性としての身分がある。
そう、書類には記されている。権力というか、影響力でごり押しされた形だ。
まぁ、別段困ることではないし、それ以外は正しいものだから
何もこちらからは言うことはない。
しいて言うのなら議会をどう黙らせたのか、だ。

まぁ、ばれても特には困ることはないだろうし、
反対もなくすんなりと通ったのだろうと思うが。
クロイツウェーグの家名が上手く働いたのも事実だ。
クロイツウェーグは、帝都でも有数の名家だ。

先代当主の双子の弟であるギペルの言うことが通ったのだろうと推測する。

まぁ、このギルベルティーナという名の女性がおそらく孫であると認識したのだ。
クロイツウェーグも直系の子供が病弱なのでいざという時の備えなのだろう。
真偽のほどは分からないが、おそらくそうであろう。
そして、この女性は６年前にたまたまポートフォリカにいたから難を逃れているが、母親はファリドハイドで死んでいる。これについては裏が取れている。ギペル・クロイツウェーグが見つけ出すまでずっと、一人だったようだ。

書類に記された、男装している女性の剣士。
それが、“僧衣の騎士”バイルシュミット。

騎士よりも騎士らしいと最近評判の傭兵なのだそうだ。

羊皮紙に書かれた経歴は隙もなく。一般にありふれたものに見える。
少なくとも、矛盾や記述の間違えはない。
その子供が、幼いということを除けば。
年齢の欄には１６と半年という記録が記されていて、
間違いではないことを伝えてくる。

いや、自分の立場から考えれば１６は幼くないのだけれど。
騎士として、男としての１６ならともかく、彼女は女性なのだ。
しかも、まだ１６の。

普通の一般家庭の女性なら今が一番華やいでいる時期である。
それを捨ててまで、傭兵として背筋を伸ばして、
生きているこの女性に何を言えるかといわれても何も言えないのだが（彼女なりの信念があって、こう生きているのだから自分が口をつっこむわけにはいかない）。

牢に入った密かに重要人物（彼女本人で無くて過保護な周りなのだけど）の、
ちらりと見た幼さが残る寝顔を思い出すと、
痛ましく感じてしまうのかもしれない。

騎士団長らしくない。
騎士らしくあれ、それが自らに課せた誓いだというのに。
いや、女性に優しくするのも騎士道にあるから間違ってはいないのかもしれないが、
彼女は今のところ重要参考人なのだ。

多分。いや、おそらく貴族の騎士にはめられたのだと思う。

ため息をついた。

正直、何という面倒な事をしてくれた、と部下に怒りたい。
あの三姉妹の当主は敵にはまわしたくない人材で、
中立の立場であるクロイツウェーグの扱いもデリケートな問題なのに。

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

夢の中で夢を見た。
水面（みなも）の月、胡蝶の夢、空の星。
絶対に掴めないモノ。
幻の存在。
不可能なものの例え。
そんなのみたいな、不確かなもの。

訳が分からない。
そもそも“心”の精霊ってなんだよ。
精霊自体が信じられない。
開口一番、罵られたんだが。
不可抗力の原因不明の事故だったんだけど。
相手側でも不手際があるらしい。
次元が違うから、すっごい責任問題になってるらしいけど。当事者は蚊帳の外だ。
（なんか、ローレライやらとかの固有名詞が聞こえた。ローレライって言われたら私が思い浮かべるのは祖国ドイツのライン川のローレライ伝説の人魚だけなのだが）。
どうなるんだ、と思わずぼけっとしてたら、声をかけられた。
衝撃的な事を軽く投げかけられた。
「死ねばいい・・・」、と。
きっとそう思った私は間違ってはいない。
魂がこの世界に馴染んで定着して帰れないって、直球で言われたんだけど。
私に分かりやすく言うのなら、黄泉戸喫　だそうだ。
黄泉の国で食べ物を食べると黄泉の国から帰れなくなるやつ。
それで、水や飲み食いしたせいで、私は帰れないことが確定したらしい。
諸悪の根源。
むしろ遠い時空に居るローレライまじほろべ。
「酷っ！！」

どこかで、そんな声が聞こえたような気がした。
むろん、無視した。

ところで、目が覚めた。

壁に背を預ける形で寝ていた為に首が痛い。
凝り固まった関節を動かし、ほぐしていると。
遠くに反響して聞き取り難いが人の、声が聞こえた。
こちらへと向かってくる、軍靴の音。

何故かその音にぞわりと、鳥肌がたった。
やばいものがくる。
そうとしか思えなかった。

ＳＩＤＥ：シュヴァーン

「・・・出ろ」

言葉少なに、指示をする。
真っ白い髪にアイスブルーの瞳の男装の少女は、こくりと頷き、
そろそろと鉄格子を掴んだ、真っ白すぎる肌に鉄格子の黒のコントラストが美しい。
僅かにうつむいて牢から出てきた。
整った顔は青ざめた顔をしている。

確かに、銀の髪のあの人の面影があるかもしれない。
そこまで、思い出した所で首を振った。
・・・思い出すな。

これは、ダミュロン・アトマイスの記憶だ。
騎士団隊長主席、シュヴァーン・オルトレインの記憶ではない。

「あの・・・、わ、俺はどうして」

まだ、切り替えに慣れていないらしい。
動揺している様子が手に取るように分かった。
アイスブルーの瞳が動揺に揺れている。
光の光量のせいか、先ほどよりも瞳の色が濃くなっているように見えた。

「騎士団の事情で君を早く解放しなければいけなくなった。・・・それと、君の事情はこちらで理解している。本来の話し方で構わない」

そう言うと、こちらの話をすぐに理解したのか。
目を伏せ、ただ黙って頭を下げた。

「わかりました。・・・えっと、騎士様」

その言葉に、俺が目を丸くする番だった。
丁寧な口調から察するに、本来の気象は傭兵らしからぬ性格なのだろう。
苛烈さもあるだろうが、年齢にはそぐわないほど落ち着いている。
ニ重人格の様に二人の人格をころころと変えている弊害、というものもあるだろう。
二重の性格は、本人が気付かないうちにじわじわと領域を狭めてくる。

・・・だが、死人の俺が心配することではない。
正直、どうでもいい。

「シュヴァーンだ。シュヴァーン・オルトレイン。・・・騎士団隊長主席を務めている」

だから、自分でも名乗ったのが不思議だった。
今後、この女性はギルドに所属する可能性が高く。
深く知られれば、“天を射る矢（アルトスク）”のレイヴンであると気付く可能性も高まる。
それなのに。

「（・・・今回はレイヴンとして、すごし過ぎたのかもしれん）」

自分に舌打ちを加えてやりたくなった。
初歩の切り替えさえ上手く出来んとは、情けない。
よく理解のできない感情が胸に湧いた。

七話　解放された（後書き）

次回も頑張ります。

八話　アスピオにて（前書き）

実はひっそりとあれな人。
レイヴンに若干似てる。
自分に非は無いのにいきなり全部奪われて、放り出された。
しかし、思いきり罵声を浴びせれる存在が存在する（ここがレイヴンと違う所）。
そんな、ひと。

八話　アスピオにて

「あんた、冷静に見えて実はバカじゃないの」

アスピオに帰ってくるのが遅れた理由を聞かれ、答えたら、心底あきれた顔で、開口一番そう言われた。

自分でも、そう思う。

と、同意したら、ため息をつかれた。

なら、直しなさいよ、と。

それには、苦笑(わら)って、直しても治らないから、こうなんだよ、というしかなかった。

それを言うと、本気であきれた顔になってリタはどこかに行ってしまった。

きっと、資料館だと思う。

それが分かっていても追いかけれなかった。

追いかけてもどうにもならないし、なら料理でも作っていた方がよっぽど建設的だ。

「きっと、私には追いかけられたくないだろうしなぁ・・・」

――――異世界に落ちてきて分かった事だって、ある。

例えば、人との距離のとり方だ。

昔ならば、嫌われても距離を詰められただろう。

手を伸ばして、自分の思うように言の葉を叫べただろう。

今の自分(わたし)には、絶対に出来ない禁忌(タブー)だけど。

だって、今の私には半年と少し分の基盤しかない。
あそこには１６年分の基盤と、それを認めてくれる人たちが一握りながらも存(い)在た。
自分の性格的な問題で、心から打ち解けている人は少なかったが、気軽に会話を楽しんで、時には一緒に遊ぶくらいに打ち解けている人はいたのだ。
少なからず、己の性格を分かっている人もいた。
ああ、そういう性格なのねと納得してくれるだけの空気の様なものがあったのだ。

しかし、今の私には片手の指にも満たない基盤しかない。
リタの事は感謝してるし、大切に思っている。
同じようにギペル師匠の事も尊敬している。
だが、それだけだ。

姉妹のように長い時を一緒に過ごしたわけではないし、
本物の師弟のように苦楽を共に過ごしたわけでもない。

だから、自分の思うことを投げかけて、全てなくしてしまうのが怖かった。
手を振りほどかれるのがなによりもなにをされることよりも恐ろしい。

だから、踏み込まない。
（踏み込めない）。

つかず、離れず、間合いを取る。
相手が不快に思わないぐらいに、

相手に嫌われない位置に、
相手に好かれすぎない様に、
――――――相手に、距離をとっていると悟られない距離に。

反吐が出るくらい、の最悪な人間だ。
相手に真心を差し出せない様に、深く踏み入れさせないようにする人間。
それが、相手を傷つけることさえあるというのに。
その存在するルールを無視して、気付かないふりして生きている。

呼吸をするように嘘をつき、笑うように遠ざける。
手を伸ばされても、気付かぬふり。
声を掛けられても、聞こえないふり。
愛したがりの怖がりで。
のばされた手ですら満足に握り返せない。
道化よりも性質が悪い。
何たる、人間か。
今の私は、過去の自分が一番、唾棄する類の人間だろう。

「（リタは気付いてない）」

笑顔を顔に張り付けた。
それだけは、しっかりと理解している。
気付かせないぐらいの演技力はある。
気付かれたら、全力で離れるしかない。
歪み過ぎている、と自己で理解できるぐらいにはまだ、大丈夫だ。
だけど、あの真っ直ぐな子に私は似合わないし、時々怖くなる時がある。
真っ直ぐでひたむきできらきらと光る宝石の様な、そんな輝きの女の子。

きっと、あの子がいなくなったら、私は病んでしまう。
それに、あの子は自分の手を取ってくれる家族の様な人間が欲しかっただけで、
私が欲しかったわけじゃない。
だから、私はあの子がそんな存在に会えるまでの代替品だと思っている。

依存しない様にしないと。
あの子がかりそめのものより大切なものに出会った時の為に。
それを己が邪魔をしない様に。

距離を測らねば。
依存しない。依存されない。
家族の様でそうでない。
私はそんな立場の人間でいい。

「（・・・きっと、ギペル師匠は気付いてる）」

自分でもあきれるぐらいの歪みっぷりなのだから。
人生経験豊富そうな、あの人が気付いていないわけもない。
さっき挨拶に行った時、いつも（いつもといっても、そんなに長い付き合いじゃないけど）は動かさない表面筋が不愉快そうな色に彩られた。

牢でみた夢のせいで、きっといつもよりも心が死んでるんだ。
そうに、違いない。
そうでなきゃ、己が哀れすぎる。

「（怨む事の出来る対象が存在するから、私はまだ死なずにすんで

いる）」

死人や道化と私の差などそれぐらいでしかない。

八話　アスピオにて（後書き）

実は主人公も大変なんだというのを表したかった。
結構精神的に崖っぷち。
死んでいないけど病みかけ。
それも、どうなんだろう。

次回も頑張ります。

九話　まさかの出会い（前書き）

まさかの出会いです。
主要メンバーでなくサブキャラと出会いました。
そして、主人公、無駄にストイックな色気があります。

九話　まさかの出会い

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

結局、リタと師匠に土産を渡した後、すぐに船に飛び乗った。
あそこは居心地が良すぎて怖い。怖すぎる。
依存できるものがありすぎるのだ。
依存して自己を擁立する自分を想像して、震える。

依存して己を擁立する人間が居るのは知っているし、別に何とも思わないが。
一人だけ放り込まれた異世界でそんな自分になるのは恐ろしいことだと自分は思う。
次に一人になったらすぐに壊れてしまいそうだ、と思えるからだ。

その恐怖に震えながら、最短距離を最高速度で走り抜け、港に辿り着いた。
船の持ち主は大抵漁師や帝国なのだが、ギルドのものもある。
顔見知りのギルドメンバーに声をかけ、交渉をし、
護衛をする代わりにただで乗っけてもらう事に成功した。
“幸福の市場（ギルド・ド・マルシェ）”の首領と知り合いなのはこういう時に役に立つ。
信頼をされてるから無茶すぎない限り、色々できる。
信頼を裏切らない様に、働かなければならなけど、信頼をされ、働くと末端の人にも顔を知られるから、頼みが通じやすいのだ。

船旅は、快調だ。
手元でナイフの砥ぎながら、何となしに見た。

きらきらと光りを浴びて輝く海の美しい事。
思わず、目を奪われた。
白波が船に寄せては返し、美しい波紋を描くのを見つめていると、
紺碧の狭間に、ピンク色の何かが、見えた。
「（え、ちょ、何あれ。・・・ピンクの魔物なんて海に居たか？）」
とりあえず“幸福の市場（ギルド・ド・マルシェ）”の船員に声をかけようとした時、
見えたのは、人の顔だった。
・・・人？
「おい！！人が落ちてるぞ！？」
船内に向かって、叫んだ。
どたどたと、船員が駆け上がってくる音を聞きながら、
すぐさま傍にあったロープを腰に巻きつける。
柱にしっかりとロープがくくりつけられているのを確認した後、
手入れをしていたナイフを鞘に納め、腰にさし、
ざぶんと海に飛び込んだ。
服を着たままだった為に、身体は重い。
それでも、見た以上ほうってはおけなかった。
というよりも自分はその時に何を考えていたのだろうか。
ただ、よく自分でも分からない何かに後押しされたのは確かだ。
何かがどうにかなるような気がしたのだ。
結構必死に伸ばした腕。
その指先が浮かんでいた人間の服に触れた。

指先をひっかけるようにして引っ張る。
ずしりと重い。
両の手で引っ張った。

まじかでみると見間違いかと思った髪はやはり薄桃色、ピンクの色合いをしていた。
肩に腕をまわし、上手く乗っけた後、ロープを手に持っているギルドメンバーに目配せした。
ロープがぐいぐいと引っ張られる。
若干、ロープをくくりつけた腰が痛いがいたしかたない。
人命優先だ。

「ッは、」

引っ張り上げられ、しびれる腕でロープを外す。
その後、水にぬれて重くなった外套を脱いだ。
（もちろん、下は丈の長い長袖と分厚いシャツ。体の線が見えないようなスラックスだ。外套なら脱いでも支障はない）。
何故か、その行為にざわりとざわつく声がした。
・・・何でだ？

ＳＩＤＥ：ギルドメンバー

男にしては細い、女よりも白い項（うなじ）に、はらりと珍しい月色の髪がまとわりつく。
ぽたぽたと毛先から項を伝って服の中に吸い込まれていく様子は、男のくせにしっとりとした艶（あで）やかな艶があった。
海水が目に入ったからなのか、普段と違い伏し目がちな瞳は、潤ん

でいる。
そして、それで、実は髪と同色の睫毛がけぶるように長いのが分かった。

「（やべぇ・・・！）」

何が、やばいのか分からないのが一番やべぇ。
何であんなに色気があるんだ。
可笑しいだろ！！

この空間の可笑しな雰囲気に気付いたからか、
彼は僅かに眉をひそめた後、闇色の外套を外す。
身体にぺたりとはりついたシャツやベストが、色っぽく。
肌の露出なんてほぼ皆無なのに扇情的だ。

手袋をつけたまま、濡れてぐしゃりと湿った前髪をうざったそうにかき上げる姿さえ、
妙にストイックな色気があった。
硬質に整った顔は美しい彫像の様で、唇の紅さと、
切れ長の透き通るような蒼の瞳がいやに目に付いた。

その様子にいつの間にか喉の奥に唾が湧いていた。
ごくりと喉が鳴る。
そのフェロモンというかエロさに周囲がざわめいた。

それに一瞬怪訝そうな顔をした彼の名はギルベルト・バイルシュミット。
基、傭兵“僧衣の騎士”と呼ばれる傭兵は、呆れた様に、苦笑いした。
その表情を一瞬で消し去った後、爪先を噛んで黒革の手袋を外した。

ようやく見えた顔以外の肌はそれこそ雪のように白い。
ほうっと女のギルドメンバーが感嘆のため息を漏らした。
女もうらやむような、という形容がこれほど当てはまる奴も少ないだろう。

「・・・で、そいつは大丈夫なのか？」

細い、白い、指。
武器を握るよりも楽器や絵筆なんかが似合いそうな形のよい長い指は、
海に落ちていた漂流者を指していた。

比喩で無く時間が止まる。

・・・忘れてた。

一斉に動き出す、俺ら。
あるものはタオルを取りに、あるものはお湯を沸かしに、
あるものはこの男でも着れそうな衣服を見つくろいに、
あるものは体温の低下を防ぐための毛布を取りに行った。

彼はため息をついて、薄桃色の頭をした男の横にしゃがみ込む。
そして、首筋に手を当てて、脈を測り始めた。

「医者か治療術師は、この船に居るのか？」

それは俺に向けた言葉で、透き通るような色素の淡い蒼の瞳に射すくめられた。
びびり、どもりながらも俺は答えた。

「ああ！すぐに呼んでくるよ！！」

「頼む・・・」

それが怖くて、俺は彼らに背を向け逃げた。
ナニカとは、具体的には分からない。
だけど、酷く恐ろしかった。

九話　まさかの出会い（後書き）

次回も頑張ります！

十話　何故こうなった（前書き）

ナチュラルにいつく人。
彼は戦っていないときは普通の人の様な気がする。
ギャップは激しいけど。

十話　何故こうなった

なんで、こうなったのか未だに分からない。

そんなことを考えつつ、スープをかき混ぜた。
ふわりと空気に乗って、ブイヨンで味付けしたスープに、
ジャガイモを薄くスライスしたものと玉ねぎのスライスしたもの、
とき卵を混ぜた。
私が大分、好きな味をしたスープだ。

用意したパンはドイツではＢａｕｅｒｎｂｒｏｔ（バウエルンブロート）。
Ｌａｎｄｂｒｏｔ（ラントブロート）とも言われる田舎風のパンだ。
一般的には粗挽きのライ麦粉に粗挽きの小麦粉を加えた酸生地を作って焼く。
ライ麦粉は粗挽きであるほど酸味が強くなり、酸味は保存性を増す効果がある。
外皮が厚くて硬く、中は茶色がかった灰色をしている。
見かけは個人の度合いもあるが白パンに慣れている人にはぎょっとされることがある。
味や形は地方によって様々に異なるが、どれも美味しい。代表的なものに　ベルリーナー・ラントブロート、　シュヴェービッシェス・ラントブロートなどがある。

この間、貰った。もとになるタネを発酵させて自家製のヨーグルトを作り、
余った卵を使って卵サラダも作った。
ザワークラフト（キャベツの千切りをいろんな香辛料と調味料で煮込んだもの）を付け合わせにフランクフルター・ヴルスト（一番ポ

ピュラーなウィンナーだ）もある。
白ワインで母国ドイツで言うミュラー・トゥルガウに似た味のワインも用意した。（度数の低いものだからこの世界では問題ない。ドイツでも度数が低いモノは子供でも飲んで良かったし）。
あとは、スープが出来るのを待つだけだ。

デザートに昨日作ったバターケーキ生地のＡｐｆｅｌｋｕｃｈｅｎ（リンゴケーキ）もある。
（ドイツではケーキのことをＫｕｃｈｅｎ（クーヘン）もしくはＴｏｒｔｅ（トルテ）と言う。トルテと聞くと、ビスケットを砕いてカップ仕立てにしたものにフルーツがのっているお菓子を思い浮かべることが多いらしいが、ドイツではすこし異なる。Ｔｏｒｔｅ（トルテ）はかならずスポンジの間に生クリームかクリームがはさまっているもの、そして比較的やわらかい。Ｋｕｃｈｅｎ（クーヘン）は硬い生地が多く、クリームは挟まっていない。切り方による区別はしていない）。

思わず、口元がゆるむ。
完璧だ。
誰もいなかったら、完璧に顔を緩めていただろう。
自分で自画自賛する位には上手く出来ていると思う。

「できたのかあぁぁ？」

威張るようにそう言う男の顔面にスープでもぶっかけてやりたい気分になった。
何故か、あの後助けたら懐かれた。
失敗したと、とっさに思った。
人にこんなに懐かれるほど、深入りする筈なかったのに。
何も知らせずに立ち去るはずだったのに、何故かばれて。

いつの間にかダングレストの私の家に居座るようになった。
あのギルドメンバー一発絶対にどうにかして殴る。
出そうになった舌打ちを喉に押しこんだ。

「美味そうだぁ」

肩のあたりに顎が乗り、髪が首筋に当たる。
くすぐったい。
そう、一人暮らしのはずのダンゲストの私の家に先日助けた男がいる。

顔立ち自体は少し癖はあるけど端正に整っている顔だ。猫っぽいかもしれない。
細い男物のカチューシャであげられた髪は、元はピンク色のようなのに、
染色しているのか知らないが所々に金や黒の箇所がある。

二重ですっとした切れ長の瞳は、私は初めて見る赤い色。
そもそも、赤い目なんて初めて見た。
兎みたいなのか。いや、それよりも赤黒いから柘榴色か。
純粋な赤とはまた違う、角度や光の加減で色が変わったように見える瞳。
いくつかの宝石の名前が頭に浮かんだけど、そんな形容は無用で不要だ。
純粋に綺麗だと思う。
私のありきたりに存在する青の瞳よりも綺麗だと思った。

どちらかといえば肌も白い。
私も結構身長が高いのだが、私よりも普通に身長は高く、細身でスラリとしたスタイルだ。

「手伝えよ、ザギ君や」

けっと笑う。

一応、料理をするのは好きだ。

だから、褒められるのは普通にうれしい。

ほころびかけた顔をごまかすように皿をその手に押し付けた。

十話　何故こうなった（後書き）

主人公からしたら、お互いに歪んでるから、ある意味、気を張らないで済む組み合わせ。

次回も頑張ります。

十一話　実はとある事情で知られてる（前書き）

主要キャラで無く、やはりサブキャラ。
とある事情から性別が知られてます。

十一話　実はとある事情で知られてる

リタ・モルディオ様

こういうことはきっちりと書けと以前師匠に怒られたので、こういう形式で書かせていただきます。

お元気でしょうか？

魔導器（ブラスティア）にかまい過ぎて、ご飯を食べるのを忘れていませんか？

夜通し本を読んで、寝不足になっていませんか？

・・・自分でも丁寧に書きすぎて、自分に対して気持ち悪くなりました。

今度は普通に書きます。

なぜか、私ことギルには同居人が出来ました。

何故？といま書面を呼んでいる貴女も思っているでしょうが、

正直、自分でも何故？って感じです。

気が付いたら奴が居ました。

仕事で帰ってくると奴はダングレストの家のソファーに寝そべってます。

なんかもう、色々あったんですが愚痴になるので割愛します。

泣きたくなるくらいいろんな事がありました。

でも、まぁ、戦闘が絡まなければちょっと変わった普通の奴なので、

なんとかいっしょに暮して行けます。

・・・無理してナイデスヨー。

夜中に時々全身血まみれで帰ってくるとか。
それなのに、怪我ひとつないとことか。
その状況で抱きついてくんなとか。

言いたい事はあるけど、別に嫌なわけじゃないんだよ。

あと、何故か、勧誘を良くされるようになりました。
あれか、あいつのせいか。

傭兵一人でふらふらしてるのも疲れてきたので入ろうとは思います。
きっちりした、有名な所なのでリタは心配しないでください。
ばらつきのあった収入も安定するし、福利厚生、
いざという時の医療態度やバックアップがいいところだから。

では、また。

G・バイルシュミット

そこまで便箋(びんせん)に書きあげた瞬間、背中にやや固めの暖かい重みが乗った。

「あいつって、俺の事かよ、ギル・・・」

「君以外に、誰が居んのさ、ハリー君」

手早く、便箋を淡いブルーの封筒におさめた後、のりでしっかりと封をした。

ぎゅうぎゅうと痛いくらいに抱きしめられる。
視界の隅で金糸が揺れる。
さらさらのそれが首筋に当たって、くすぐったい。

肩に乗せられた頭をぽんぽんと優しく叩く。
ため込んで、それをどうにかしようと私の所に来たらしい。
そんな奴に鞭を打つようなことを出来るはずがなく。
私はため息を喉に押し込んだ。

あちこち歪んでるのなら、こういうのも捨てられれば楽なのに。
捨てられた犬の様な眼差しに私は弱い。
しかも、社交辞令以上に知っている相手なら、尚更。
これは直さないときっと痛い目に見るだろうな、とは思っている。
しかし、これは

「・・・ハリー君や」

「ぁんだよ・・・」

ぎゅうっと抱きしめる腕に力がさらに加わるのが分かる。
それに苦笑して、告げた。

「こりゃあ、セクハラだよ」

「ん、・・・あぁぁぁぁ！！」

一拍、何をお前言ってんだみたいな顔をした後、
とあることを思いだして正気に戻ったようで。
腕を引っぺがした後、ズザササと音を立てて、私から離れる。
・・・そんなに、勢いで離れなくても。

「顔真っ赤ー」

「うるせぇ！！」

思わず、僅かに微笑んで指摘すると顔を真っ赤にして、吠えるように叫ぶ。

なんかそのイッパイイッパイの姿にきゅんとした。

うわぁ、可愛い。なにこの十代。————いじり倒したい。

そんなのを内側に秘めながら、手を伸ばした。

「ケセセ、胸に抱いてやろうか。————今はさらし巻いてるからペったんこだけど、それでいいなら」

「そういう問題じゃねーよ！！バカ、バカギルゥゥ！！」

真っ赤になって叫ぶ、ドン（ハリー）の孫にキュンとした秋の夜。

散々からかい倒して、叫びまくったからか喉が痛そうになったハリーが居た。

蜂蜜を入れたホットミルクを手渡してやる。

げんなりした様子でそれを受け取ったハリーに笑う。

「・・・すっきりしたろ？」

「あれだけ、さけべばな・・・」

疲れてはいるけど、今日来た時の危うい光はもう瞳には映っていない。

それには安心した。

「私はさぁ、自分がそうされたことが片手で数えるくらいしかないから、上手くできないけど愚痴ぐらいなら聞けるし、叫ばせる事ぐらいできるから」

つんと指でハリーのおでこを弾いた。

「・・・あんまため込むなよ、友人君（ハリー）」

それにハリーは目をまん丸にした後に、ゆっくりと頷いた。
それに私はこの日初めて安堵で笑った。
ハリーもふっと笑った後、マグカップの中のミルクを飲んだ。

「それにしても、甘ぇな」

「甘いだろう」

そんな些細なことで笑いあった。

十一話　実はとある事情で知られてる（後書き）

次回も頑張ります。

十二話　初対面は水辺でした（前書き）

色々あった、初対面。
取り合えず、スプレッドを叩き込みました。

十二話　初対面は水辺でした

初めて見た時、俺がとっさに思ったのは、白いだった。
肩ぐらいまでに切りそろえられた銀糸の髪、雪みたいに色素の抜けた白い肌。
こちらを少し驚いたように見つめる透き通るようなアイスブルーの瞳。
ほっそりとした首に、くっきりした鎖骨。
引きしまった美しいラインを描く腰と凛とのびた背筋。
形のいい、大きく見える胸・・・。

って胸!?

「なぁ!!」

僧衣の騎士がおんなあぁぁぁぁぁ!!?

そんな、動揺しきった俺に直撃したのはスプレッド。
水に巻き上げられながら、俺が最後に見たのは
凍りついたように俺を見つめる真っ青な目だった。

「で、言い残したい事は?」

ひんやりとしか感じられない空気の中、凛とした声が耳朶を打つ。
目の前に居る僧衣の騎士と呼ばれる、傭兵。
女であると判明した傭兵は、冷たい美貌を誇っていた。

綺麗な女だと、思う。

どこまでも白い、色素の抜けた容貌。
昔、母さんに聞いた昔話に出てくる雪の女王みたいだと思った。

肩までの長さまでなのが惜しいくらいの上等の絹糸の様な銀の髪に、
冬の空のように透き通る淡い青の瞳。
肌の色は、白くて、雪みたいだと思った。

「――――悪い」

「は？」

想定していなかった答えだったのか女の眉間にしわが寄った。
それでも、不快感を与えないのだから相当の美人、
というか絶世と言い換えていいんじゃないだろうか。

「あんたに不愉快な思いをさせた」

「え？」

唖然としているのが気配でわかるが、
ここで言っとかないと、後悔する。
殺されたり、ぼこられたりする前に言っておかないと
俺はこの人の前で人の体を見た最悪男の烙印を押されたままだ。
・・・結果的にそうなってしまったわけだけども。

「すまなかった」

土下座する。

最悪だろ、俺。
何らかの理由があったとはいえ、男装してた女性のことを最悪の形で知ってしまった。
そのあげくに女性の裸を見て。
しかも、動揺してたとはいえガン見だぜ。
・・・理由をあげたらとんでもない男じゃねえか俺。

「・・・」

「・・・・」

沈黙が落ちる。

「顔をあげてくれ」

俺の聞き間違いで無ければ。
――――少し、困ったような声が聞こえた。

「・・・確かに、見られたのは嫌だったし、嫌だけど。私は加減が出来ていたとはいえ中級魔術を当てています」

真っ青な瞳が、少しだけ色が濃くなったように見えた。
飲み込まれそうなくらい、きれいなあお。
ほっそりとした指が額に触れる。
剣を持つからか、昔触れた事のある女性の指よりも少し硬い、
それでも男よりは断然柔らかい指が俺の額にかかった前髪をのけた。

「・・・けが、してる」

冷たいだけかと思っていた、透き通る声が少しだけ柔らかくなった。
その時になって、俺は初めてこの女性が温かみを持っていて事に気付いた。

「・・・わが指に宿るはユピテルの恩寵、ファーストエイド」

淡々とあまり抑揚のない詠唱と、ふわりと光る指先。
光ったと思ったら、もう額の痛みはなくなっていた。
凄い腕らしい。
礼を言うと、目の前の人は瞳を伏せた。
あのきれいなあおはもう見えないし、表情も分かりにくくなった。
けれど、彫像のように整った顔は分かりにくいが確かな困惑が浮かんでいて、
どうすれば、いいのか俺にはよくわからなかった。

「これで、貸し借り無しって事で・・・」

彼女の中で何かをまとめたのか俺に口を挟ませずに
それだけ言うと、銀の髪の僧衣を身にまとった女は素早く林の中へ消えていった。

それが、俺とギルの――――――

「・・・ハリー君や、君は私のうちで何をしてるんだい？」

頭上にかかる、あきれたような柔らかい声。
揶揄するような響きがこもっているが実際にはそんなにあきれていないと知っている。

青い、空の様な瞳がこちらを映し出す。
それは過去のように綺麗だけど何も映していなかったガラス玉のようではなく、綺麗な輝きを秘めていて。

「昼寝」

「――――よだれ、こぼすなよ」

くすりと僅かに口角をあげて珍しく目で見て分かるくらいに微笑んだ後、
それだけ言って、ふいっとオーブンに向かってしまった。

こいつには俺が時々、ギルドの重圧というか期待から逃げたい事が分かってるんだろうなと思う。
敵わねぇな・・・。
ふわりと漂ってきた甘い香りに苦笑して、ソファーから立ちあがった。
御茶の支度ぐらい、手伝うか。

十二話　初対面は水辺でした（後書き）

次回も頑張ります。

十三話　“天を射る矢”（前書き）

主人公は若干暗め。
いやでも、しょうみ、いきなり家族から引き離されて、誰も知らない所に連れて来られたら暗くなったりすると思うんですよね。
内面が歪んでる、主人公でした。

十三話　“天を射る矢”

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

夕暮れが街を染め上げる。
美しい朱と金のグラデーションを視界におさめながら、橋を渡った。
ここは、永遠の黄昏の街。
またの名をギルドの巣窟ダングレストという。

かつんとブーツが床を打つ。外套（マント）の裾が風になびいてひらひらと舞い泳ぐ。
剣帯におさめたバスタードソードがベルトの金具をこする。
その、普通なら気にも留めない僅かな音にさえ苛立ちが募る。

音楽を修（おさ）めていた。
そんな自分の耳のよささえ、今はいらなかった。
げんなりとため息をつきたい気持ちでも顔は無表情のまま。
そんな、自分がよくわからなくなりそうだった。

足を止め、うっそりした気分で見上げた館のような建物は、何も変わらない。
ここでＵターンを決めてやれたらどんなにいい気分だろうか。
全力で逃げ出したい気分になって来た。
さて、どうするか、と無表情ながら頭の中で考えていると。

「ギル！」

「・・・ハリー君」

そうだよ、君に口説かれなきゃこんな、人の多い所に来なかったよ。
君が色々と私の事を考えて“天を射る矢(アルトスク)”に誘ってくれているのが分かったから、決めたんだよ。
――――――――――なんか、すでに心が折れそうだけど。

自覚はしている。
自分の容姿が飛びぬけて人の視線を集めるものであると。
まず、身長が高い。これは自分の同年代と比べてだが、
まだ伸びているので全体的に見ても高い部類に入るだろう。

第二に、色素が薄い。薄いというか欠乏しかけなくらい薄い。
肌と瞳は兎に角も、髪はマジで殆ど無い。
ゆえに、白い髪に白い肌。
瞳こそぎりぎりアイスブルーだが、若干銀混じりの虹彩。
あと少しでも瞳に色素がなかったら赤紫だった。
それぐらいに色素がない。
銀の髪は珍しい。
肌も、殆ど温かみのある色をしていない。
色素の無さも相まって、私は人ごみの中でも目立つ色彩だ。

第三に顔。
・・・まぁ自分で言うのもあれだけど、そうとう目立つ顔立ちだろう。
父親似のゲルマン系の血筋がもろ現れてるし、鼻筋やら輪郭やらも整っている。
客観的に見て、中性的にという形容のつく
美形とか美人のくくりに入っているんだそうだ。
しかも、色の白さで神秘的に見えるらしいよ！
はっはっはっは、そんなのいらん。

だから、人の視線を集めるわけで。
慣れてはいると言っても、私は人の奇異の視線とか大っきらいなわけで。
正直、帰りたい。

分かりにくいだろうけど背中を冷汗がだらだらと流れているし、
胃もじくじくと痛みを発しているし、
若干頭痛もしてるんだ。
そんな私の内面を露知らず、ハリー君はにっこりと笑った。

「ようこそ、“天を射る矢（アルトスク）”へ！」

その笑顔に私は、ひきつった笑いで返した。
心の準備はしてたけど、さすがにこんなに視線を集めるとは予想外だよ。
畜生が！

ＳＩＤＥ：ドン

ハリーの連れてきた新入りである傭兵。
細い体躯に、平均より高い身長。色はめったに見た事がないくらいに白い。
どこか癖のある銀の髪に、切れ長のアイスブルーの双眸がこちらを見据える。
アイスブルーの双眸は、こちらを見ているようで見ていない。
ガラス玉のように見えるが、鏡の様な時もある。
・・・普通の瞳に見える事もあった。
ふわふわと流れ、捉えどころのない瞳。

そういう風にしか、生きていけないのだろう。
生真面目そうな風貌からは僅かににじみ出る諦観と、悲嘆があった。
本人は自覚をしているのだろう。

どうにかまっとうになろうとしていて、けどそれがどうしようもないと理解している。
――――理解して、しまっている。

頭がいいのもその場合による。
こいつの場合だと、頭がよくて一瞬で見通して理解してしまったんだろう。
どうしようもなく不幸だ。
見通せなくて、理解できていない方が開き直れて幸せになれただろうに。

それでも、諦め切れていない。
それが絶対に、どうやってもかなわないと知っているのに。
それを、手放せない。
手放した方が楽と知りながら。
手放したら、自分でいられなくなると思いこんでいるから。

ギペルの手紙に書いてあった通りのガキだ。
意固地で頑固で、頭がいい癖に、人への甘え方も頼り方も分からない。
泣き方も、人の手の取りかたも忘れてしまったガキ。
どうしようもなく、不器用すぎるガキだ。

「・・・ギルベルト・バイルシュミットです。よろしく、おねがいします」

女にしては、低い声。
だが、男にしては高めの声だ。
おそらく、俺とレイヴン。
それにこいつを連れてきたハリー以外には男と思われてるだろうが。
見事な変装だった。
中性的な顔立ちや身長を存分に生かして、演技力の高い演技をする。
しかも、それを演技だと悟られないぐらいには器用なガキだった。

自覚をしている奴に言うことはない。
自覚をしていても直せないようだが、それをするのはハリーだ。
俺じゃねぇ。

「おう。しっかり、はたらいてしっかり稼ぎやがれ」

俺の言葉に殊勝にうなづいた。
その時に目に入った瞳は鏡のように光っていた。

十三話　“天を射る矢”（後書き）

ドンはレイヴンの内面を一目で見抜いた人だから色々鋭い人だと思う。
だから、一発で歪みというかひねくれっぷりを見抜かせてみた。

次回も頑張ります。

十四話　気付かれたのが運のつきでした（前書き）

地味に、計算が早くて器用な子供。
おっさんを出して見たけど、なんか違うような気がする・・・。

十四話　気付かれたのが運のつきでした

「なんでだ・・・」

「ギルちゃんが異常に計算できるのが悪い」

「普通だろ。カウフマンのとこなら、俺以上に出来る奴らがいるっての」

はぁ、とあきれたようにため息をつく、銀髪の傭兵。
もとい、偽名ギルベルト・バイルシュミット、
本名はギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット。
氷のように青い双眸を瞬いて、彼女はため息をついた。

返事をする間にも腕は休む間もなく動き、几帳面に紙面を埋めていく。
紙面の上の文字は本来の真面目さを示すかのように、
きっちりと見本にしたいぐらいの綺麗な字をしていた。

「いや、あれは商人ギルドだからね。ギルちゃんみたく、専門でないのに正確に早くできる子はめったにいないわよ」

「知るか」

けんもほろろに、ざっくりと斬り捨てて、数字や文字を書き。
ある時は計算をして、結果を書く。
真っ直ぐな目は真剣さを帯びていて、
前に見た鏡の様な瞳と同じにはとても見えなかった。

この子はどれが本物なのかしら。
どれもこれもあやふやで不確かでとらえようのない、ナニカ。
諦めたような眼をしてるくせに、光りを帯びている時もある。
（特にハリーとかといる時は、忘れられるのか優しそうな表情をしている事が多い）。

すさんだ瞳、冷めた瞳、優しい瞳に、何かを帯びている瞳。
どれも全部同じ人が持っているモノ。

相反する感情を器用に全部まとめて自分のものにしている子。
もしかしたら器用すぎて自分が抱え込みすぎている事に、
気付いていないのかもしれない。

何よりも強く、折れないのに、簡単に壊れてしまいそうな、折れてしまいそうな。
そんな儚い危うさを持っている子供。

「・・・もっと簡略に分かりやすく書けよ。なんだこれ、酷いぞ」

「愚痴愚痴いってもしかたないでしょー。商人の集まりの“幸福（ギルド・ド・マルシェ）の市場”基準じゃ苦労するわよー」

赤ペンで修正し、別紙に新しく書きなおして整理する。
小さな文句とか悪態をついても、投げ出さずに、
きっちりとまとめあげられたそれに性格が垣間見える。

「俺が言いたいのはそうじゃない・・・」

「じゃあ、何よ」

「何で、新入りに帳簿の整理とか金銭の管理を任せるんだ！？普通、金銭とかの管理は管理する専門職がいるだろう！？俺が横領とかしたらどうすんだよ！！？」

訳が分からん！！こんなの理解できるか、畜生！！

心底理解できない様に呻きのように押し殺した叫びをあげる。
俺も昔、経験した体験だ。
内心、うんうんとうなずきたい気分だ。
分かる分かる。
いきなり、投げ渡されても困惑しか湧かないよね。

慰めるように、なだめるようにぽん、と肩に手を置いた。
やっぱり厚めの生地の上着や服を着ているとはいえ、
普通の男より細くて柔らかい感触をしている。
ぺしっと痛くない弾き方ですぐに肩から手を離すようだったけど、
今の実感で十分だ。
やっぱり資料でみたとおりに女の子だ。
やっぱり隠してても女の子なんだよねぇ、と思いながら口を開いた。

「ドン、だからねぇ・・・」

その言葉にぴたっと動きが止まる。
その見事な固まりっぷりにこちらの方が心配になった。
ぎぎぎと機械のように首が動きこちらを見つめてくる。

硬直した、元々無表情気味の顔は変わらず。
色素の薄い青の双眸は困惑と疑問に染まっている。
首をほんの少し傾けて、

（常に演技をしている俺でも僅かにしか分からなかったけど）。
困ったように、口を開いた。
声色もいつもとは僅かに変わっている。

「・・・ですか」

見るからにがっくりと力の抜けた様子で、椅子の背に身体を預けた。
ぎしっと椅子の背が鳴る。
珍しい銀の髪をくしゃりと書きあげる。

「まぁその、がんば！ギルちゃん！！」

「・・・超、他人事だな。レイヴンさん」

けせせ、と。
彼女は死んだ目で笑った。

十四話　気付かれたのが運のつきでした（後書き）

称号：
アルトスクの会計番：なぜか、新入りなのに任されている。計算が早く、きっちりとした貴女に。閉める所はきっちり閉める門番様さ。

次回も頑張ります。

十五話　意外性の塊（前書き）

拾ってくる人と、冷静に突っ込む人。

この小説のザギは戦闘以外ではちょっと変わった普通の人です。

十五話　意外性の塊

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

今日も今日とて、ユニオンで経理兼金庫番。
何故、傭兵を単独でやっていた私が金庫番なのか、その謎は謎のまま。
疑問を抱えながら、ユニオン本部の中での仕事を終わらせた後。

さっさと、帰路に付いた。
暗くなっていたし、借りている家は街燈の少ない、というか皆無な場所にある。
なので、魔導器（ブラスティア）ではなく、古風だが使用するのに遜色のないランタンを借りた。

適当に日持ちする食材を買ってから、家に向かう。
同居人の様なもんであるザギは帰ってきてんだろうかとか考えつつ、近道の為に暗くなった路地を歩いていると。

こつん、と。つま先が何かに当たった。
何だろう。
疑問に思って手に持っていたランタン（こんなことに魔導器（ブラスティア）は使えない）をかざすと
そこにはけがだらけの女の子が二人いて、ぎゅんと心臓が変な音で跳ねた。

「（え、なんで、傷だらけ？）」

ここの世界に来て、いろんなことをしたし、みたし、何でもほぼやってみたけれど、
これにだけは、こういうのだけにはなれない。

剣を持って、魔獣を、敵意を持って向かってきた生き物に
立ち向かうことは出来るようになった。
でも、人を傷つけるのはだめ。
稽古や試合ぐらいならなんでもできたけど。
本当の戦いになると自分でもわからないうちに拒否反応が出た（師匠に仕込まれたから、殺さずに止めることは出来たけど。人に剣を向けるのは嫌だった）。
殺すのもだめだ。

・・・まだ、人を殺(あや)めた事はないけど、だめだ。

だから人がけがをしたり、死んだりしている姿を見るのも嫌いだった。
傭兵を単独でしていた時に助けた人たちは、
傷を魔法で治した私を優しい、と表現したけれどそうじゃないのだ。
自分が見るのが嫌だったから、助けたのだ。
嫌な気分を持ってその人たちを見る自分が嫌だったから癒したのだ。
――――――私はエゴの塊だ。

そう見えていないだけのエゴイスト。
良くも悪くも自分の事しか信じる事が出来ない。
少なくとも、今は。

昔は、こうも歪んではいなかったのだけど。
あきらめにも似た思考に笑い。
そっと、口から吐息が漏れた。

だから、この子たちを見捨てられなかったのもエゴだ。
それ以外の理由なんてない。
ただ、傷ついている人を見て嫌な気分になる自分を見るのが嫌なだけ。

できるだけ、傷が痛まない様に彼女たちを背負う。
幸いかな、家はここからほど近い。

「・・・こんなんだから、苦労するのかね？」

思わず、ぼやいた。
見上げた空は黒く、月は見事な三日月。
自分を笑っているような弧を描く月を見て、瞳を細めた。

ＳＩＤＥ：ザギ

時折死んだ目をする同居人がガキを二人拾ってきた件について。
しかも、死にはしない程度だが傷だらけ。

床に、静かに寝かせて、新しい薪をストーブに放り込んで、湯を沸かし始めた。
俺に説明はない。

俺はこいつが実は、突拍子のない一面もあるということを結構前に気付いている。
思わず、声をかけた。

「オイ、ギル・・・」

「何だい、ザギ君」

テキパキとタオルやらグミやら包帯やらを取り出しながら、ギルは振り向かずに聞く。

ため息をひとつついて、棚の前へ歩き横に立つ。

棚から医療箱（特大）やらを取り出すのを手伝いながら、尋ねた。

「誰だぁ、あれは」

「知らん。拾った」

しれっと返された言葉にぎょっとする。

俺でも、驚くことぐれぇある。

「ギル、お前なぁ・・・、これはねぇよ」

「そうなのか？」

きょとりと訳が分からないといった風に首を傾げる姿にめまいがした。

・・・無意識なのか。無意識じゃねぇか。

「そーだ」

「ふぅん、そういうもんなのかねぇ・・・」

普段はつり目のように見える、実は二重の青の双眸が不思議そうに輝く。

本気で、分かってねぇよ、こいつ・・・！

沸かしたお湯を、桶にはり、真新しいタオルを放り込む。
傷ついた二人組のガキの上着を脱がせた。
・・・傷が見えないと術のかかりがわるいからな。
納得できる理由があった。
が、ぱっと見、恐ろしく整った顔の男装の女（中性的）と
傷だらけの将来有望そうなといっても過言ではない少女。
なんとなく、いかがわしい書物とか雑誌の一場面の様に見えた。
・・・なんつーか、百合っぽい。
とりあえず、この思考をのぞかれたら、殺されるなぁ。

「・・・どうした？」

「いんや、なんでもねぇ」

ぐるりと顔がこちらに向けられる。
野生の勘というか女の勘って恐ろしい。
そう、肝に銘じた。

若干動揺した俺を見て、少しばかり不思議そうな顔をしたが、すぐに顔をそらした。
とりあえず、傷を治すかと呟いて、あいつは拾ってきた奴らの前に立つ。
右耳につけられた青の石がはめ込まれた銀のクロスのごついピアスが明り取りの窓から入って来た光りに煌めく。

・・・あいつの武醒魔導器（ボーディブラスティア）だ。

「じゃあ、今からヒールかけるから」

場所借りるよ、と微かに笑う姿にため息をつきそうになった。
止めてもやめないのは理解している為に、手をひらりとすることで答えた。

「――――好きにしろ」

こうなったら、引かない。
そう、知っているがゆえの呟きだった。

十五話　意外性の塊（後書き）

次回も頑張ります。

十六話　仕事の鬼（前書き）

きちんと真面目な所に定評がある、ギルです。
仕事中は寡黙、無表情気味、威圧感の３つが目立ちます。

十六話　仕事の鬼

真っ白い髪に、透き通る碧(あお)の瞳。
白磁も真っ青なシミ一つない滑らかな肌。
表情をあまり変えないからか、彫像や彫刻のような硬質に整った顔立ち。
形のいい耳には、鈍い銀色のクロスのついたピアスがはめ込まれている。

かっちりとした襟が付いた黒の外套に黒のスラックス。
僧衣の様なそれは、露出が顔だけといっても過言ではない。
足元は傭兵らしくかっちりとした革のブーツで、
僧衣のように見える格好なのに帯剣をしている。
そのせいか、どことなく浮世離れした印象を人に与える格好だ。

「・・・なんだこれ。ふざけてんのか」

ピシリと空気が音を立てて凍りついた気がした。
おそれおののく、ギルの部下。
睥睨するように静かにアイスブルーの瞳が部下を一瞥する。

その眼差しに一瞥されていないのに、
俺の背筋、きっと他の奴らの背筋も冷えた。

それぐらい、冷めた瞳。
コキュートスの氷とはこんな色合いをしているのだと思えるような、
透き通った色。
切れ長の、形の整った瞳がゆえに、きつく、どうしようもなく怜悧

に、見える。
彫像のように整った中性的な容姿も、色素の淡さも相まって、
ぞっとするような冷淡な印象を与える事すらもある。

しかし、他人にそう評されようと、その姿が一種の近寄りたがい雰囲気が
本人の美しさに華を添えているのもまた事実。
上品な所作とも相まって、元貴族だったのではないかとすら噂が立っている。
その噂をこの女は知っているのだろうか、ふとそんな事を考えた。
「…この書類を書いた奴はふざけているのか。そもそもこの予算の意味がわからない上に計算ミスしまくりだ、ボケが。こんなものに予算割けるわけがない、赤子からやり直せ愚か者が…とでも伝えとけ」

「ひいいいいいっ」

あ、ついにとうとう、部下が悲鳴を上げた。
周りも、引いている。
あの瞳は怖い。
冷たすぎる青に睨まれるのは恐ろしすぎる。
顔立ちが恐ろしく整っているから尚更。

「相変わらず容赦ないな」

「それが俺の仕事だ」

他の奴らも出て行って急に静かになった部屋の中、ギルはそう呟く。
俺しか部屋に居なくても口調は崩さない。
なんだか性別を知っている分、ちぐはぐな気がした。

「“碧眼（へきがん）の悪魔”」

「？なんだ、それ」

「お前のあだ名」

「・・・はぁ？」

うろん気で、酷くめんどくさそうにこちらを見る。
青の目は俺に説明を求めていた。

「鬼のように財政整備して、金庫番やってて、強いし怖いし、手堅いからな」

「それで、俺は悪魔呼ばわりか・・・」

あきれたようにため息をつく、そんな些細な仕草でさえ
ダングレストの人間にはない丁寧で上品な仕草だった。
あきれてゆるんだ青の目も、いつもよりも幼く見える。
この表情の移り変わりを初めて見た時は正直、詐欺だと思った。

ギルを知る者は皆、奴を無表情だと言う。
何を考えているのか、怒っているのか喜んでいるのかすらわからないと。
表情のない瞳でじっと見据えられると心の奥底まで見透かされてし

まいそうで、
だからギルの前では寛げないのだと。
でも俺は知っている。
じつは、ギルは意外と表情が豊かな事を。
だから、こいつが無表情だなんて、感情がないだなんて大間違いだ。
ほんの僅か目を細める、頬を動かして唇を引き上げる、引き結ぶ。
仕事中の眉間に刻まれた皺の数や深さだってその都度表情がある。
小さな変化かも知れないけど、注意深くじっくり観察すれば、分かる。
ただ皆、気付いていないだけだ。
ギルが気付かせない様に立ち回っているからかもしれないけど。
もし、そうなら、こいつは・・・、

「・・・ハリー」

「んだよ、ギル」

「これ、君宛の書類だ」

「げっ、まじかよ」

「おおよ。まじだ」

ほいっと、投げ渡す姿はさっきまでとは全然違う。
どこか、安らいだもので。

「・・・お前、もうちょい取り繕えばいいのに」

「――――めんどい」

俺の提案をけっとばかりに吐き捨てた。
その姿に安心した。
こいつが、愛想をふりまき始めたら今よりもっと人気が出る。ただでさえ、高嶺の花（男装してるから男と思われてるわけでこういう表現はおかしいと俺は思うわけだが）扱いなのに、面倒な事になるだろう（ストーカーとか、盗難とか、前にそう言ったら、家に猛犬がいるからとか言ってた。ザギを犬扱いなんてお前にしかできない）。

そんなのが容易に想像が出来てため息をついた。
どんなタイプにしろ、自覚なしの人間ってやっかいだ。
場合によっては自覚している人間よりも。

十六話　仕事の鬼（後書き）

次回も頑張ります。

十七話　ある夜の話（前書き）

主人公、アスピオには殆ど帰ってません。
この世界に来てから一年と半年ぐらいの時間です。
ザギと主人公は仲がいいです。

十七話　ある夜の話

「――――おっさんが連れて帰ろうか？」

酒場の片隅で、ひょうげた男の声がした。
その男のそばには机に突っ伏した銀の頭が見える。
その道化の様な男に苛立ったので、近づいて名前を呼んだ。

微かに反応し、顔がむくりと起き上がる。
アイスブルーがこちらを見た。
俺の顔を見て騒ぐギルドの男達を無視し、腕を差し出す。

「・・・ギル」

ふらふらと俺の手を取り、立ち上がったが顔色は悪いまま。

「レイヴンさん、ハリー。迎えが来たからお先に失礼します」

へらりと笑って告げたところをみるにこの野郎、相当酔ってやがる。
舌打ちをひとつ。
腰に腕を回して、ふらりふらりと揺れている身体を肩に無理やり押し上げた。

「うわあぁぁ！」

なんとまあ、のんきな悲鳴を上げて、俺の肩にしがみつく。
抵抗はなかった。

ぽかんと目を見開いて、こちらを見つめるギルドのメンバーに笑いそうになった。
キャラが違うと感じているようだ。

どうやら、この同居人の素の表情をあまり見たことがなかったらしい。
心底、愉快だったが質問は嫌いだ。
だから、わらって

「邪魔したなぁ」

声をかけられる前に、くるりと踵を返した。
同居人は何も言わない。
ただ、肩の布を掴む力が僅かに強くなった。
分かりずれぇ。

へこむんなら。もっと、わかりやすくへこめばいい。
思わずそう思った。
傍からは分かりにくいように、つねられた。
図星か、お前。
つーか、人の思考を読むんじゃねぇよ。
そんな言葉が頭の中に浮かんだが、
このプライドが高いやつはこんな場所では何も言わないだろう。
だから、黙って人通りのない道を選んで歩き始めた。

担いで歩いてしばらく。
思い当たる事があった。

――――こいつ、軽過ぎだ。

明らかに標準よりも軽い同居人の身体に舌打ちをする。
男だ、と性別偽って男装し、ストレスやらなんやらを着実に体にため込み。
傭兵というハードな職種についているのだから、仕方ない。
そう言う奴もいるかもしれないが、そんな奴は死ねばいいと思う。
苦労しすぎなんだよ。心因性ストレス持ちとか繊細なのに。
なんか、男連中と一緒くたに扱われてるし。

「（そんなやつの口を俺が壊してやろうかぁ・・・・）」

今のところはおとなしく肩に担がれている同居人に聞かれたら、
心底あきれられるような事を考えた。

筋肉がつきにくい体質らしく、か細い体。
それでいて見かけよりもだいぶんに筋力があるのはおかしいとは思う。
だけれども、この同居人はおかしくない、と言い張るだろう。

今はさらしを巻いてるから分かりにくいがきちんと胸もあるし、
今でも触れている個所の身体は女らしく柔らかいのだ。

鼻をくすぐるのは、仄かに、僅かに香る百合の香り。
香水だろうか、それともこいつは花の傍にでもいたのだろうか。
取り留めのない事を考えながら、歩を進めた。

「ザキ・・・」

家路の途中まできて、ようやく肩の荷となっていた女同居人が口を開く。

「なんだぁ？」

「お前は、いなくなんないよな・・・」

泣いていないのに、泣きそうだと俺は思った。
泣きそうな子供の様に、こいつは言う。
俺以外の男なら、ここで約束なり誓いなりをしてやるんだろう。
泣きそうな顔をした、惚れた女がいるのなら。
だけど、俺は嫌いだった。
絶対に無理だと、絶対に保証の出来ない約束事や誓いなんて。
そんなものをたてるのは大嫌いだ。

「・・・さぁな。俺だって普通に死ぬぞ」

「・・・なんで？」

泣きそうな声だ。
心底、打ちのめされている人間の声。
でも、泣いちゃいないんだろうなと思う。
この女は心底意地っ張りで、不器用な女なのだ。

「俺も、お前も人間だろうが、死ぬ時ゃ死ぬんだよ」

「やだ」

子供みたいな返答だった。
ぎゅうと細い指が肩を掴む。
細い癖にいやに力がこもっていた。

「いやだ」

「ギル、お前なぁ・・・」

まるでいつもと立場があべこべだ。
駄々っ子のような幼稚な答弁を繰り出すギルに、苦笑いした。

こんなのギルドの連中が見たらぎょっとするだろう。

“僧衣の騎士”バイルシュミット。“銀剣”の異名を持つ、剣士が、
天を射る(アルトスク)矢の“碧眼の悪魔”が子供のような状況になっているのだ。

「、わたしは、やだ」
「これ以上、一人になるのも」
「おいていくのも」
「おいてかれるのも」
「みんな」
「嫌だ」

とぎれとぎれに、伝えてくる、伝わってくる言葉。
なにがこいつの身にあって、こいつがこうなったのかはしらねぇ。
だけど、なんつー女だとは思わなくもない。

「・・・傲慢だな」
「子供よりも性質(たち)が悪(わり)い」
「そんなの、駄々じゃねぇか」
「叶わないのも知っている癖に」
「何で、そんな事を思うんだよ」

すっげえ、歪みっぷり。

自覚してねえようだが、こいつは結構子供っぽい。
聡くて、賢くて、取り繕うのも演技も上手いから気付かれていないだけだ。
こいつ、ガラスよりも脆い。
多分、すぐに壊れる。

「だって、」

「だって、あんだよ」

「ザギとわたしは似てるだろう」

「――――どこがだ」

外見の相違点は何もない。
性格だって違うだろう。
お互いに歪んでいるのは同じだが、種類が違う。

「・・・いきたがりのしにたがり。同じ穴の狢じゃないか」

色素の薄いアイスブルーの瞳がいつもと違う色をする。
怜悧な色が薄れて、どこか蠱惑(こわく)的で艶やかな色を覗かせる。
思わず、喉がごくりとなった。

「――――お前、死にたいのかよ」

「・・・そうかも。だけど、いたいのはこわいんだよ」

「死にたいのなら、静かに殺してやってもいい」

「、優しいなぁ、ザギは」

「だから、俺以外に殺されるな」

そう、口の端から零れ落ちたのは本音だった。
悔しい。口惜しい。
この女は、ただの一言で人を縫い付けて、離さない。

まるで、蜘蛛の様だ。そう、思う。
いつの間にか人を絡みとって離さない。
いつの間にか、こいつから離れられなくなっている。

俺は最初、この女に興味だけで近付いたのに。
いつの間にか、欲しくなっていた。

冷たいアイスブルーの双眸を自分の手で変化(かえ)て、見せたい。
そう、思った自分にめまいを感じた。
俺も酒にやられた。そうに違いない。

「(だって、この女はただの同居人なのに)」

俺が、そんな事を思うなんてありえない。
黙って、担ぎなおして、空を見た。
今日は星が上手く見えない。
そんな夜だった。

十七話　ある夜の話（後書き）

主人公の精神の病み具合がチラリ。
歪んでしまった子なんですよね。

次回も頑張ります。

十八話　ザギと私（前書き）

仲がいい二人。
とりあえず、意外と面倒見がいい

十八話　ザギと私

同居人であるザギは家の玄関の扉を足で蹴り開けた。
派手な音と蝶番の軋む音が耳に反響する。
跳ね返ってくる扉をひょいっといとも簡単に避けて足で閉めた。

行儀が悪いと口を出そうとしたら、
寝室のドアも蹴破られて、乱暴に、寝台に落とされた。
ぼふりと、枕に沈んだ私に、羽毛の毛布と分厚いタウンケットも投げ落とされる。
何事か言う前に、服の襟を緩められ、ピアスと剣帯を外され、床に放り落された。
カシャンと床に落ちる音がやけにリアルに聞こえた。
流石に流石にちょっと待てと口を開く。

「ザギ、」

「やっぱりな・・・」

なにがだ？

そう口を開こうとしたら。
冷たい手が額に当てられた。
きもちいい・・・。
思わず、目を細めて額を手に擦りつけた。
もしも私が、猫であったのならごろごろと喉を鳴らしている所だ。

「お前、熱上がりかけてんだよ」

「あー、・・・」

道理で、寒気がして骨が軋むと。そう呟くと。
バカじゃねえのと、軽く小突かれた。
少しの衝撃だったのに
目の奥に火花が散ったような気がした。

「・・・しかも、空きっ腹に酒だろ。誰だって体調崩すだろうが」

ザギはあきれたように笑って、言う。

「そ、っか」

「寝てろ。———今日は仕事がねえから、安心して寝てろ」

そうやって乱暴に髪を撫でられた。
くしゃりと髪と髪がこすれる音が耳元で聞こえる。
そんなことをされるのは随分、久しぶりの事でその温かさに泣きそうになった。
ザギの手は、剣のたこで皮がぶ厚く指も節ばっている。
音楽家だったあの人達とは全然似てないし、
似ている所は指が長いことぐらいなのに。
それなのにあの人達と同じくらいに、
どうしようもなく優しかった。
人の命を奪う腕だって知っているのに、ぎこちなかったけど腕は優しくて。
泣きそうだ、と思う。
知りたくなかった。

こんなに優しいのがザギの本性だということなんて。
ぎこちないけど、しっかりといたわるように髪を梳く。
男にしては長い指。その指から伝わってくるのは、優しさで。
下心もなくて、ストレートに心配だと感じているのが分かる。

なんだよ、これ。
こんなの欲しくないのに。

それは、全部、こちらに来てなくしてしまったものだった。
心配する声も、額のタオルを変えてくれる手も、髪を撫でる手も。
ずっと、昔に母さんや父さんがくれた温かいものだった。
いつか絶対になくなってしまうと分かっているものなのに。
振りほどけない。
むしろこんなに優しい男（やつ）の優しい腕を振りほどける人間が見てみたい。

「ザギ、やめろ・・・。これ以上優しくすんな」

「――――何でだ」

「・・・手放せなくなる。これ以上優しくされたら、依存する」

熱で目に涙の膜が張っていくのが分かる。
何という醜態だ。
自分で自分が信じられない。
知らない世界に放り出されて、何時も気を張って生きてきた。
師匠もリタもいい人たちだったのに信じきれないで。
手を伸ばし方も忘れてしまった。

そんな、傍に居てくれた人にすら手を伸ばせなかったのに。

この男はそれを簡単に乗り越える・・・・！
それって、どうなんだよ・・・！！

「いいなぁ、それ」

「はぁ？」

「上等だ。絶対に離してやんねえよ」

――――覚悟しとけ。

にやりと笑って頬に柔らかい感覚。
とりあえず、毛布を顔まで上げた。
恥ずかしい。なんだ、これ。

ばかみたいだ、と声に出さずに呟いた。

十八話　ザギと私（後書き）

次回も頑張ります。

十九話　二人はとことん噛み合わない（前書き）

自覚してない奴ら。
いや、一人は気付きかけてんだけど、もう一人は今に精一杯だから気付いてない。
そんな二人。

十九話　二人はとことん噛み合わない

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

誰かが頭を撫でてくれたような気がした夜。
夢を見た。

その夢の中で私が知ったのは、
痛みが酷過ぎると逆に感じないだなんて言うが、
そんなのは大嘘だということ。
そんなの最初にぬかしやがった大嘘付きは死んでしまえとさえ思う。

だって、傷は付けば付いた分、どこまでだって痛い。
意識を失ってしまえばいいと理性は私に囁いた。
だが、意地が邪魔をして素直に目を閉じる事はできなかった。

じくじくと身体のうちが痛む。

手の届かない場所に懐かしい人たちの顔が浮かんだ。

――――そこで、目が覚めた。

「・・・・気持ち悪い」

喉に手をやった。
熱っぽい。
瞼の裏まで熱を持っているようだった。
関節さえもぎしぎしと軋む音が聞こえそうだ。

思わず舌打ちをした。
私のこれは深刻に熱が出る前触れだ。

シャツがはりついて気持ち悪い。
しかも、パジャマじゃなくて堅苦しい格好。
襟は緩められて、剣帯は外れ、ブーツは脱い（脱がされた？）でいるけど。
かっちりとした堅苦しい格好だ。
普段はともかく、調子の悪い時に着るもんではない。

「・・・あつい」

ベットから起き上がろうとして、床に跪いた。
フローリングの上に倒れ込む。
力が入らない。
やばい、本格的に熱が上がる前にこれはやばい。
やばすぎる。

「いたい」

ごつんと頭が床に落っこちた。
起き上がる気力もなくて、床に伏せる。
床の木目もどこかぼんやりと見えた。
やばいかもしれない。
死ぬかも。

ひゅーひゅーとしたらやばい呼吸音が喉から漏れる。

「・・・き、もちわるい」

「お前は何やってんだよ」
黒のスラックスに包まれた足が見える。手にはバスケットとでも言うべき籠。
ピンク色の髪を細い金属のカチューシャで止め、額や顔を出した髪型。
それでよく見えるようになった顔は整っている。
切れ長の紅い瞳はあきれた色を宿していた。
「ザギ？」
「寝てろ、死にかけ同居人（おんな）」
「――――力はいんないんだけど」
そう私が告げるとチッと舌打ちをひとつ。
しゃがみ込まれて顔が近くなる。
籠を脇に置いて、私の腰にザギの腕が回る。
「しがみついてろ」
そう、言われ。
よく訳が分からない状態だが、肩のあたりの布にしがみついた。
瞬間、浮かび上がる身体。
平衡感覚がくるっている身体で必死になってしがみついた。
くくっと喉の奥で笑われた。
ふざけんな、この状況でいきなりこうなったら私だって動揺するわ。
一旦、ソファーに落とされる。
文句を言う暇もなく、真新しい焦げ茶の毛布をかけられた。

・・・ザギのだ。

「替えのシーツと枕カバーは？」

「・・・え、っとマホガニーのチェストの一番下」

「分かった。毛布とシーツ、それに枕カバーは洗って干すからな」

テキパキとシーツと枕カバーを取り換えた後、
またひょいと持ち上げられてベットに座らせられる。

毛布は俺のを使え、俺は予備のを使うから心配すんなぁ。
シャツとかの着替えは俺は出せねぇから、熱が下がってから自分で着替えろよぉ。
タオルと洗面器はおいて行くから、俺が選択してる間にちゃんと身体ふいとけ。
それだけ滔々と告げて、来た時と同じようにばたんと扉が閉められた。

「・・・とりあえず、着替え。それで、身体拭こう」

熱が深刻に上がる前。
しかし、着実に熱が上がっている状態での判断はそれしかなかった。
何であの同居人が助けてくれたのかすらわからない。
むしろ、前日の夜、お酒を飲んだあたりから記憶が混濁している。
その事実と熱にくらくらする。

体を拭いて、さらしを取って、簡単な格好になってどうにかベットに辿り着く。

ふと、ベットの足元に目をやると、
ザギの持ってきたバスケットが置き去りにされていた。
おいおいと思って覗き込むと、白い陶器の蓋のついた小さな鍋に陶器のスプーン。
そのうえには、小さなメモ。そこから覗く几帳面な文字。

『粥だ。喰え、味は保証しねえが、まずくはない。筈だぁ・・・』

「不安と期待が入り混じってカオスな様を見せているんだけど・・・」

口元に手をやる。
どうやら、自分は無自覚なうちに頬を緩めていたらしい。
どうしようもない。
なんか、胸が温かいのだ。

「ありがとう、というようなんだろうなぁ・・・」

何故か、むず痒い。
体温が上がったような気がした。

ＳＩＤＥ：ザギ

とんでもない事をしてしまったかもしれねぇ・・・。
昨夜の醜態を思い出し、ベットに突っ伏した。

目をつぶれば、月明かりに照らされて、仄かに見える
酒のせいで淡く朱色がかった白い肌が・・・。

「――――ねぇよ。ねえ、ねえ」

俺があの女にこんな感情を持つはずがない。
中性的(ユニセックス)な顔に細い華奢な体をしている女なんて俺の守備範囲外だ。
俺が好きなのはもっと女らしい顔立ちに、抱き心地のいい肉欲的な体をした女だ。
あいつ、みたいなんじゃない。

確かに、あいつを背負ったら柔らかくてちゃんと女らしかったけどな・・・。
胸も俺が思ってたよりあるっぽいし・・・。
睫毛も長かったしなぁ・・・。
って違ぇぇ!!こんな事を考えるんじゃねえ!!無心になれ俺!!

「俺が、あいつを好きとかねえよ。まじでねえよ」

俺があいつに抱いているのは興味とほんのわずかの憐憫だ。
まぁ、多少。自分の柄でもないが友情とやらも含まれているけど。
大雑把に分類すれば、こうなる。

どうしようもなく、歪んでしまった一人の女。
どこがだ、と。
尋ねられたら上手くは言えないのだけれど。
どこか壊滅的に壊れてしまっている女だ。
多分、自分が望んだわけではなかったのだろうけど。
鋭いやつなら違和感を覚えそうな位には歪んでしまった一つの人生。
これは事故の様な形で、歪められてしまったように見える。

本来はもっと、笑えていただろうに。
もっと、柔らかく表情を宿していただろうに。

何もかもなくしてしまった。
少なくとも、何かをなくした。
それのせいで、何かが決定的に可笑しくなった。
可笑しくなってしまった、可哀そうな女だ。
だから、俺があいつに抱いているのは恋情とか愛ではなく憐憫で。
俺も、あいつと同じように歪んでいるから。
同病相哀れむとかいうやつなのだと思う。
それ以上でもそれ以下でもない。
そんな、甘いものとは程遠い感情だ。

では何故、長い夜を寝ずに看病してたと聞かれたら、返答に困る。
多分、なにも俺は言えなくなるけど。
ただ、自分の指が髪を梳き。
手で頭を撫でると、見た事がない穏やかな顔になったので。
それが少し気になっただけ。
それが見たくなっただけ。
そう、それだけ。

でも、何故か、見てはいけないモノをのぞき見てしまった気分で。
相手がきっと隠したかったであろう気持ちや感情であったので。
覗き見るように見てしまった詫びに粥を作った。
ただ、それだけの事。
だから、この感情は――――

「――――ぜってぇ、恋なんかじゃねえ」

十九話　二人はとことん噛み合わない（後書き）

次回も頑張ります。

二十話　ナチュラルに看病してる（前書き）

寝込んでいるのが長い。
風邪をずるずる引きずる人。
体調を滅多に崩さない分、ひいたら酷い。

ザギはナチュラルです。
さりげなく懐に入ってくる感じ。

二十話　ナチュラルに看病してる

先日の内容を他愛のない話をする他人（同じギルドのメンバー）に告げた（もちろん、同居してるとか言ってねえし、容姿とかもぼかしてある）。
それによるとどうやら俺がもてあましているこの感情は恋とかいうものらしい。
俺は正直よく分からねぇ。だが、面倒見とか容赦とか母親の腹の中に忘れてきたような奴が面倒見てる時点で特別ってことだろうが！！と、怒鳴られた。

ふむ、俺はどうやらこいつの事が好きらしい。
多分、自分でどうしようもないくらいには。
こいつに惚れているようだ。

嫌われてはいないだろうが俺は同居人であるギルが俺をどう思っているのか深くは知らない。
それ以上に、この女の心というか感情はよく掴みきれない。

うなされている様子を視界におさめながら、額に乗せたタオルを変えた。
荒い呼吸が少し、ほんのわずかにだがおさまる。
その様子をただ、見つめた。

今は目蓋に閉ざされている青い、瞳。
アイスブルーとも言ってもいいぐらいの淡い色合いの瞳は
何時も何かをあきらめたような光りを目に宿している。
その癖、何かを羨望するような強い輝きを目に帯びている時がある。

若いのに老成した雰囲気や、死んだ人間のように壊れていると感じる時もあるけど。
というより、この女はどこか狂って壊れているのだと思う。

自身が狂いたかったわけでなく、壊れたかったわけでもない。
事故の様な後天的なもののようだが。
きちんとしている人間のように見えるのに壊れている。
それは、哀れといえるものなのだろうか？
俺には正直よくわからない。
俺はどこか、欠落してしまったこいつしか知らないからだ。
ただ、今よりももっと笑えていたのだろうなとは思えない事もない。
そしたら、俺とこいつは馬が合わずにお互いに無関心でいただろうが。
まぁ、それは今はおいておく。

こいつの壊れっぷりは、分かる奴にはすぐに分かる。

時折、顔を過ぎる暗い影の様なものや暗い色を帯びる青の瞳。
じっと、虚空を見つめている時すらある。

死にたいのに死ねず、死にたくないのに生きれない。
そんな入り混じった感情を持っている。

とことん、矛盾を極めてる。
しかも、それを自分で気づいてるから驚きだ。

狂っていると自覚しているから、普通であろうと努力する。
どうしようもないと心の奥底で悟っている癖に、諦めきれない。

かわいそうな、おんな。

見かけが普通の人間に見えるからかどこかちぐはぐな歪みっぷり。
人は、この女の様な人間を知れば、哀れと感じるのだろう。
それが、見当違いだと知らない癖に。

この女は自身であきらめきれないから、努力をしているだけだ。
誰にそれを言われても、それがなに？の一言で終わらせるだけだろう。
この女の心と感情はこの女にしか分かるまい。

でも、俺はこの女は嫌いじゃない。
むしろ、気に入っている部類に入るし、
好きか嫌いか問われたら好きだと答えれる程度には好きだ。
俺も人には狂ってると言われるが、そういったものだから
この女の歪みっぷりが気に入っているのかもしれない。
この女なら、傍に居てもいいと思える。

「それぐらい、思ってるんだが」

僅かに汗ばんだ髪を梳いた。
銀の毛は柔らかく指をすり抜ける。

「私に、それを言ってどうするんだよ」

いつも白い皮膚が色をなくし、青ざめた様子でぼやく。
真っ青な瞳は、やはりどこか屈折した蒼(あお)さを宿していた。
掠れた声が耳朶を打つ。

その掠れているが意思のこもった返事に、笑みを深め。
問いには答えずに、少し癖のある白銀の髪を手のうちで弄ぶ。

さらりとしている癖に、ふわりとした感触もある。
面白い、それ。

いつもはさらしを巻いて、身体のラインを見せない服を着ている為に性別不詳に見える、
本当は女らしく柔らかくて細い身体を抱きしめてみる。
それに肩がびくりと震えるのさえ、自覚した後なら
愛おしく感じるから不思議だ。

人恋しい癖に、怖がりで。
さみしがりのくせに、臆病者。
助けを求める行動も、助けを呼ぶ言葉も忘れてしまった。
可哀そうなかわいいおんな。

しかも、それを表に出さない。
自覚もしていない女は、肩をびくりと揺らして固まった。

結局、拒絶の言葉はなく。

自覚していないまでも、拒絶されない程度には心のうちにいるらしい。
それに、喉の奥で嗤う。

見開かれるぱっちりと大きな、瞳。
いつもは切れ長に見える瞳を本来のものに戻して、こちらをぼうっと見つめてくる。
近くで見ると実は虹彩に銀が混じった冷たいアイスブルーの瞳。
いつもは毅然としたそれに、茫然とした光りを宿している。
そんな状態でも吸い込まれそうなくらい綺麗な、あお。

肩に顔をうずめながらさて、と考えた。
この女はどこまで自分を許してくれるだろうか、と。

二十話　ナチュラルに看病してる（後書き）

次回も頑張ります。

二十一話　一夜明けて（前書き）

ギルサイドのお話。
いろんな意味で瀕死だけど、一線は越えてないです。
しかし、地味に生々しい表現があるので注意して下さい。

二十一話　一夜明けて

「いたい、」

街の外では朝のはずだか、差し込む夕日を浴びながら、
ようやく口から出たのはそんな憎まれ口だった。

痛みに耐えかねて持ち上げると。
視界に入る手首には、ぐるりと一回りする赤黒い痕。
軋む骨と関節。特に腰と背中から酷く軋む音がする。

しかし、起きる前よりもましになった頭の鈍痛。
息苦しかった呼吸に、発声もましになっている。
寝不足でかすむ視界はさっさと諦めた。

ザギに連絡を頼んでなんとか一週間分の休暇を貰っていたからいいものを。
これで今日から仕事だったらとぞっとする。
無理だ。今日中に動けるようになるのかも怪しい。
というか、私は一体何をした？

「（いくら、熱で理性がぶっ飛んでいたとしても、あんなことを許すなんて・・・！）」

死にたい。穴があったら入りたい。
むしろ、穴をよこせ。入ってやるから。

「（ここはいっそ、ジャパニーズハラキリ？――――ああ、自分が

信じられない！！）」

瞼を閉ざすだけで鮮明に映し出される記憶に目眩がした。

「（しかも、それが嫌じゃなかったってことがさらに複雑だ・・・）」

文句を言っている癖に、
口角が若干だが上がっている事は自覚している。
本当に、嫌なわけじゃなかったのだ。
手を掴んでくれた。
抱きしめてくれた。
手を離さないでくれた。
言葉にすれば、簡単な事。
だけど私にはとても、とっても難しい事だった。

温かくて、優しくて、誰でも持っているような当たり前のものを。
全部、落っことしてしまった私には難しい事だったんだ。

だって、なくすことなんてありえないと。
二年前、こちらに来た時になくなることなんて
ありえないと思っていた私の１６年間の全てを。
全部、なくしてしまったんだから。

もう一度、それを掴み取るのがどうしても怖かった。
だって、それはもう一度失ったら、私は壊れてしまう自信がある。
――――嫌な自信だが確実な予感だ。破滅コース一直線の、予感。
絶対にこれは外れないだろう。
今でさえ、人間（ひと）として危険な立ち位置（ばしょ）に居るのだ。
もう一度、それを手にとって失ったらと思うと怖くて、怖くて堪ら

ない。
考えるだけで背筋が凍る。

だから、私は絶対に手を離さない人に傍に居てほしかった。
ささやかすぎると普通の人は嘲笑い。
陳腐な願いだと貴族は吐き捨てるかもしれない。
家族とかがきちんといてくれる人には分からない望みだろう。
だから、無理やりに、乱暴にだったけど、
手を掴んで引っ張り上げてくれたザギを私が嫌いになれるわけがなかったのだ。
ただ、それだけの話。

リタや師匠の手は掴めなかったのに。
なぜだろう。こいつの腕は何故か掴めた。
正直、今でも分からないけど手を掴んだ事に後悔はしていない。
ぐだぐだ過ぎた事を言っても、結局のところはそうなのだ。

しかし、少しばかりあの年頃の男には酷い事をしたと思う。

「（さぁ、これからって時に気絶だもんなぁ・・・）」

思わず遠い目で天井を見上げた。
今この場に奴が居ないのが不幸中の幸いなのだろうか・・・。

ぎらぎらと光る真っ赤な瞳。
初めて見た時は柘榴みたいだと思った。
一対の宝石みたいに輝いていて、この世で一番綺麗な赤だと思う。

そんなザギから与えられる熱は容赦がなくて、乱暴で、嵐の様だと思えた。

その癖、目眩がするほど優しくて、気持ちよかった。
噛み付くような口付けに、耳元に落とされる低い、男らしい声。
逃げそうになる体を宥めるように、あちこちに意味のない口付けが落とされ、
細く見えるけどやはり男らしくしなやかに鍛えられた力強い腕に抱き留められた。
（意外に思うかも知れないがザギは優しい。奴に与えられた感覚は、泣きそうになって縋り付きそうになるくらいには優しい、温かさがある）。

ぴたりと体が硬直して、固まった私が大人しくなった。
もしくは覚悟を決めたと思ったのか。

私とザギの距離が零になる。
唇に掠めるように触れたのは柔らかな感触。
今までとは、違う。
獣じみた食らいつかれるような貪られるようなものではなく。
ただ、ナニカ、尊い感情のもの。
今度こそ、完璧に硬直して金縛りのように動けなくなった私を尻目にザギが動く。

私の癖のある髪を男らしく角張った指が引っ張り、私の首筋を浮き彫りにさせる。
ひと呼吸も瞬きすらも許されずに、熱を持った吐息に侵食された。
風邪による発熱と、何かに駆り立てるように与えられる熱にくらくらした。

目の前で弾けるように光が散る。
衣服を半ば剥かれかけ、首筋に噛み付かれたところで意識が飛んだ。
そりゃあもう見事に。
痛みが走った瞬間(とき)、視界が白に染まってホワイトアウト。
「(・・・初めてだったし、風邪引いてやばかったからしょうがなかったとは思うのだけど)」
死にたい。
二重の意味で。
「(私、今あいつの顔、真面目に見れる気がしないんだけど・・・!!)」
ベットにばたりと倒れ込んだ。
枕に頭をうずめながら、思う。
「(頼むから、心の準備が出来るまで待ってくれ・・・)」
正直、今までで一番の切実な願いだった。

二十一話　一夜明けて（後書き）

次回も頑張ります。

二十二話　しいて言うならタイミングが悪い（前書き）

ちょっとザギも不安定。
そして主人公不在。

二十二話　しいて言うならタイミングが悪い

夜も更けた室内。
明り取りの窓から入り込む月灯りがベットの中の姿をぼんやりと照らしていた。
汗で僅かに湿った長めの銀の髪が、ほっそりとした項にしっとりと張り付く。
色素の薄い為に白く肌理細かい肌には紅い痕がちらほらと。
半ば脱がされかけ羽織っただけの有様になっているパジャマ変わりのシャツから見え隠れするのは、意外と質量のある胸と無駄な贅肉一つなく引き締まった細い腰。
そのラインを薄暗い灯りでぼんやりと浮かびあがっている光景は正直エロい。
体温が上昇している為かほんのり上気して色付く目元。
そうとう、目に毒な格好だ。
というか、俺の忍耐を試しているのかあ・・・。

そこまで、思い出して俺は・・・膝をつきそうになった。
色々な意味で。

やっちまった。

俺の今の心情を表すならそれである。
なんつーことを俺は・・・！！
此処が外で無かったら地面を転げまわるとかそんな醜態をさらしたくなる気分だ。

「・・・やっちまった」

死にたい。
むしろ、あいつを殺して俺も死ぬ。
しかし、そうすると無理心中扱いになるんだろうか。
そんな不確かであやふやな事を考えながらダングレストを歩く。
この街特有の夕日が徹夜明けの目に染みた。

「（そもそも、あそこで意識飛ぶとかねーよ、まじで）」

まじでねーわ。
どんだけだ。生殺しにも程があるっつーの。
意識を失った相手にそんな無体を強いる性格なんて俺はしていない。

でも、あれはやばかった。あの姿はやばい。
普段が禁欲的（ストイック）な格好だからさらにまずい。
しかも、いつもの固い表情が年相応に緩んでた。

「（手首も細かったしなぁ・・・）」

片手で両手首がつかめるってのは細すぎだとは思う。
折れそうなくらいとか、女の体にそんな形容つかわねーよとせせら笑ってきたが実際に見ると何とも言えない。本気で細い。多分、俺なら簡単に折れる。
しかも、色が抜けてるんじゃねーかと思うくらい肌が白いから赤が異常に映える。
それにぞくりとした。
だが、いつか本気で壊しそうで怖いんだが。
鍛えてるとはいえ体質なのか筋肉がつきにくい体。

そのせいか体は上背はある癖にひどく華奢で細い。
武器を持つ癖にあいつの手は指は長く、爪は滑らかで武器を持つ手には見えない。
肌が弱いのと皮膚が薄いせいで手の肌や爪がよく裂けたり、剥がれかけて血がにじみ出る事が多いからとしっかりと丁寧に手入れもしている。
そもそも、自分で治癒術も使えるからあまり傷がないのだけど。
その白すぎる肌と細すぎる体が体質的な弱点であるとともに、大分コンプレックスなのだそうで常に体格が分かりにくく日が当らない様な長袖だ。

目蓋を閉ざせば、昨夜の光景が目に浮かぶ。
明り取りの小さな窓から入ってくる月の光に、銀砂(ぎんさ)の髪がきらきらと輝く。
白いシーツに細い体躯が埋もれて。
時折、ぴくりと浮き上がり落ちるのが楽しい。
なだらかな女の背中、俺とは違って傷なんてひとつもない。
いつもは雪みてえに白い肌がうっすらと朱色を帯びる。
項に口付けを落とすと、耳元まで朱色に染めてこちらを振り向く。
何時もは冷たい光を帯びているアイスブルーの双眸が、
自覚なしに欲を帯びてこちらを縋るように見る。
アイスブルーの瞳の色合いが涙と影で濃くなって蒼い。
それにはぞくりと背筋が泡立つ程の色香が・・・・

「・・・やっぱりやっちまった」

がしっと掴んだ手首は細かった。
口吸いで痕を残した項や背中は華奢で真っ白くて、紅が映えた。
いつも毅然とした端正な顔が俺から与えられる熱とか欲とかで、崩れて。

地金なんだろう柔らかい表情が、いやらしい表情に染まっていくのにあおられた。
いつもは抑え気味で低く見せてる声は、本当は少し高めで女らしく柔らかい。
そうと知っている奴は少ないだろう。
その本来のものよりも高い、風邪故に掠れた声は俺の欲情を呻るのに十分で。
相当、手ひどい事をしたと思う。
初めてというか処女のやつにはキツイを通り越して酷い事をした。
しかも、風邪でぐだぐだな体調の女に。
今の俺は自己嫌悪で一杯だ。

「何がだ？」

その声に、くるりと踵を返すと。
そこには金髪に緑の目をした、少年と青年の間に居るような男がいた。
整った顔には一筋の赤いラインが走っている。
ギルドのメンバーにありがちな実用的な機能性にあふれた格好をしている。
ただ、右の手だけがシャツに隠れてよく見えない。
ああ、あの時、酒場に居た奴。
ドンの孫かと納得した。

「別に・・・、ドンの孫には関係がないだろ」

わざと笑って、あいての神経を逆なでしてみる。
あいてに俺が合わせる必要なんてない。
そもそも、何も言う必要なんてないんだから。

「なっ、テメェ・・・！」

滲みだした怒り。押し殺した激情に瞳が彩られていく。
それをしり目に鼻で笑って、立ち去ろうとした。
だが、俺の背中に声がかけられる。
根性があるのか、と。ドンの孫というだけではないと実感する。
噂も本当のことだけを伝えるわけじゃねえ。
その、力がこもった声に足を止める。
振り向くと、意思の籠った眼差しとかちあった。

「ギルは、無事なんだろうな」

押し殺された声色。
ちりちりとした一触即発の空気。
それを悟ったのか、路地に座り込んでいた猫が弾かれたようにどこかへ駆けだした。
その怒気に、にやりと笑う。

・・・おもしれぇ。
箱入りかと思ってたが、ヤリ応えはありそうだ。
少しばかり遊んでみるのも悪かねえ。

「さあな」

パシリと何かがはじける音がした。
それと同時にひりつくような痛みが頬に奔る。
たらりと錆臭い液体が頬を伝って落ちていく。

「答えろよ、・・・次は当てる」

キリキリと弦を引き絞る音がする。
籠手と小弓が一緒になったような特殊な獲物。
それが、怒気と殺意を込めて俺を狙う。
込められた意思に笑って、告げる。

「やれるもんなら、やってみやがれ」

ダンと地面を蹴った。
耳を掠める弓の音を聞きながら、笑みを深めた。
これなら、結構楽しめそうだ。

二十二話　しいて言うならタイミングが悪い（後書き）

ハリー⇒ギルが心配。問題児（ザギ）に連れて帰られてるし、休暇申請はザギが持って来たし。後日、やっちまったとか結構深い意味にも取れる言葉をぼやいているザギを発見。結果バトル。

みたいな感じでした。

二十三話　喧嘩両成敗・・・？（前書き）

ハリー視点
前の話のその後の話。

三人の話

二十三話　喧嘩両成敗・・・？

「・・・君らはひょっとして馬鹿なのか馬鹿」

はぁとため息をつかれ、目の前の男装の麗人の眉間にしわが寄った。
銀の髪がきらりと灯りの光りに輝く。
蒼い瞳が冷たい光を帯びてこちらを睥睨した。
・・・すっげえ怒ってる。

「おい、・・・ギ」

「お前は黙ってろ駄犬が」

「（怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！）」

もう、正直ザギよりもこいつが恐ろしい。
背後が吹雪いてる。
むしろ、絶対零度か・・・！？

「こんなに怪我させて・・・。もうちょっと穏便にいこうとは思わないの？」

そっと俺の頬に珍しく手袋を装着していない白い手が触れる。
体温は低めだけど、温かい。
それに目を細めた。

途端に、ざわりと背筋を登る悪寒。
ザギは器用に俺にだけ、怒気を当てていた。

ギルにばれないように笑う。
ざまぁみさらせ。

「俺も、同じくれぇ怪我したけどな」

「うん、そうだね。だから、喧嘩を売ったハリー君も買ったザギも馬鹿だ」

冷静にきり捨てている癖に満面の笑顔。
目の前のギルの口角が綺麗にあがる。
凄い綺麗な表情で笑顔。
でも、すげえ怖い。
目が笑ってない笑顔ってこんなに怖ぇものなんだな・・・。

「で、なんで喧嘩してたのさ」

にこにこと笑ったまま、目は笑わずに問いかけてくる。
蒼い目は恐ろしいくらいに凍え切っているのに。
にこにこと。にこにこと。笑って。
目以外はしっかりと笑みの形をしているのに。
それにじわりとまた部屋の気温が下がって来た。

「・・・（なんか言えよ）」

「・・・（お前が言え）」

お互いにギルにばれない様に肘でつつきあう。
小声で会話も交わした。

「もっと、おっきい声でいってくれないかなぁ・・・」

平坦なのっぺりとした声。
柔らかくなった口調になぜか泣きそうになった。
柔らかい癖に抑揚が少ない。
いつもと少し違うだけでほぼ普段と同じはずの声だった。
それなのにザギの視線よりも強い寒気が背筋に走った。
思わず固まる俺らをしり目にそう吐き捨てて、
にっこりとほほ笑んだ後にギルに、

「……はぁ」

と、心底あきれたようなため息をつかれた。
何か言われたほうがマシだった。
思いっきり見捨てられた感がして、居た堪れない。
何か表情を読み取ろうにも俯いてしまった為に、顔はよく見えない。

「言いたくないなら言わなくていい。――――だけど、」

あー、と微かにうめく声が聞こえた。
ギルの白い手が色素の淡い銀の髪をくしゃりとかき上げる。
僅かな灯りにも銀糸のような髪は煌めいた。
俺の位置からは影になっていて表情はうかがう事が出来ない。

「――――なんでもない」

何かを言おうとして、ギルは口を閉ざした。

「怪我は治そう。・・・それから少し、二人とも頭を冷やして来てくれ」

（私も頭を冷やそう・・・）

そんな声が聞こえた気がした。
それに、反論する暇なく詠唱が始まる。
・・・あまり聞き覚えがない呪文。
呪文というのは騎士団とか戦闘中心のギルドとかだと既定のものが使われる。
（定型としてあったものを教える方が楽だし、威力は平均的になるからだ。本当に、魔術を扱う能力が高い奴は自分に合ったものを使う。もちろん、此方の方が稀な分威力は高い）。

だが、本来呪文とは外界からエアル取り込み、魔導器（ブラスティア）によって魔力に変換し、それを体内から体外に放出させるもの。
決まったものよりも自分が言いやすく唱えやすいものを選び、それを唱えればいいのだ。
レイヴンみたいのは、ちょっと特殊すぎると思わなくもないが・・・。

ギルのはレイヴンに比べれば普通だ。
ただ、歌の様だと思うぐらいだから。
珍しい、魔術の使い方なんだろう。
そのひと時も、ふっと消える。

「…フェアリーサークル」

柔らかい光に包まれれば、痛みはなくなる。
回復系の魔術に関しては相も変わらずにおっそろしいくらいの腕だ。
それでも、剣呑さはとれない。

ギルは怒っている。
俺らに対して、真剣に心配しているから。

きちんと向き合っているから。
怪我してきた事とかに、そうとう怒っている。
それに、嫌な気分はしない。
ただ、気まずいだけ。
沈黙が落ちて、思わず互いに目くばせする。
うなずいた。

「悪かったな、」

「――――頭、冷やしてくる」

その姿に。
それしか、言えなかった。

二十三話　喧嘩両成敗・・・？（後書き）

ギル⇒自分のせいでこうなったって分かってるけど、怪我をしてきた事に怒りやら悲しみやらいろんなのごっちゃになっている。それと同時にザギがドンの孫のハリーとやりあったのは不味くないかと不安。二人に対しては真剣に向き合ってる。
ザギ⇒自分が喧嘩を売ったから、まずかったとは思っている。自分達の事考えて怒ってると分かってるから反感は無い。
ハリー⇒自分達の事を信頼しているからこそ、怒っていると分かっている。
しかし、譲れないモノはあるんだ、みたいな感じ。

三人とも不器用な人。
そんな集まりです。

次回も頑張ります。

二十四話　自己嫌悪

本当は分かってるんだ。
これは、私のやつあたりだって。
――――本当は理解してるんだ。
それでも、怒鳴り散らしたくなることだってある。
自分に近しい人間が殺し合い一歩手前のやりあいをやってたら、尚更。

ガリっと奥歯を噛みしめた。
唇も少しばかり切れたのか血の味が微かにする。
いらいら、する。

着替えた後、帰ってこない同居人（ザギ）を探しに行く時。
偶然に見つけた同居人と同僚のぼろぼろの姿。

そもそも私は人が、その怪我をしたり、死んだりするのをあまり見た事がない。
そりゃ映画やテレビで見た事がないとは言えないけど、
・・・あの時の生活で見るのはそんなものだ。

師匠も対人系の戦い方を教えてくれたが、そういうのが駄目だと分かると。
それを出来るだけ使わなくて済む所に昔のつてを使って紹介してくれた。
自分で傷つく分には平気なのに、駄目だったから。
治せるように治療術を一番先に覚えた。

そんな私だったから。
その光景を見た時点で時が止まった。
比喩で無くて、本当に。

なんで、怪我してるんだろう。
なんで、血まみれなんだろう。

ぞわぞわと背筋が冷えて、ドッドッドッと嫌な音が耳元から聞こえた。

それを視界に入れて、それを行っているのが二人だと理解してしまった。
その途端、ざぁーっと血の気が引いて、心臓が嫌な音を立てて、
体から力が抜けて、地面に膝をつきそうになった。
飛び散る赤が気持ち悪くて、怖くて。
耳に飛び込んでくる罵声が、聞いた事のある人の声で。
どんどん傷ついていくのが見覚えがありまくる二人で。

思わず、声を上げた。
それ自体は間違っていない行為だと、今でも私は思っている。
怖かったんだ。
また、私から何かが奪われそうになるのが。
それで思わず、ピコレインを発動させて、気絶させた後、
とりあえずの応急処置の呪文を唱えて連れて帰った。
重かったし、血の匂いに血の気が引くし、散々だった。
それで、目が覚めた二人は空気悪いし。
正直あれだ、・・・怒ってもいいかなと思った。

此処まで、感情を出したのは初めてだった。

両親は一月いない事とかざらにあった。
だから、いい子のギルでいなければならなかった。
そんな子供だったから笑って一歩引いていることが多かった。
笑って、いい子にしていれば親は困った顔をしないから。
笑って、褒めてくれたから。
そうすれば、大人も皆、普通に接してくれたから。
何も、踏み込んで来ないで付き合ってられたから。

こちらに来てからは、感情をあらわにするのが怖かった。
だって、私を知ってる人はこの世界にはいないのに。
否定されたら死にたくなる。
そんな事が起こったらきっと、耐えきれない。
そう思ったから。

何が理由でこうなったのかは聞いていない。
話したそうな雰囲気ではなかったし、
聞くべきではないと思える空気だったから。
私は聞かなかった。

———聞けなかったという方が正しいかもしれない。
怖い。踏み込むのがこわい。
深入りしてなくすと思うと怖くて踏み込めない。

女々しいと笑うなら笑え。
いきなり異世界、今までの経験と全てがなくなってしまったら、こうなる。
そう、断言してやる。
この世界に来てから、偏頭痛持ちだぞ私は。
・・・まあ今はそれはいい。

深入りも出来ずに佇むだけのことしかできないなんて・・・。
ああ、こうも言葉を連ねてもそれはただのいいわけでしかなくて。
自分がただ、駄目なだけで。
もう期待をするのですら怖くて出来なくて。
だから、

「――――、なさけない」

ただの臆病者じゃないか。

呻くように吐き捨てた言葉が二人が居なくなった部屋に響く。
本音すら一人で無いと言えない自分の精神状態に死にたい気分になった。

二十四話　自己嫌悪（後書き）

絶賛、鬱になりかけの主人公（若干、本当に若干だが立ち直りかけ）。

しかしやっぱり只管、マイナスな方向に突っ走っている。

自分の心の内側に入れてる人（本人無自覚）に優しくされると泣きそうになる。

自己嫌悪とか自己否定が半端ない。

本人が自覚してないだけで、くる前の世界でもあれだったという話。

我慢しすぎてるくせに、自覚してないタイプ。我儘とか多分、しかたすら知らない。

何でもしてもいいのよって言われた時、何すればいいのか分からなくて動揺が半端ない感じ。

ザギは彼女の歪みっぷりに気付いてて放置。

彼女が爆発しそうになって崖っぷち一歩手前になるたびに助けてる感じ（手助けをしてほしくない事を知っているから。・・・怖がりなのも分かってるから）。

見てて愉快だし一緒に居て楽しいからか、壊れるのは見たくないんだとか。

苛めて泣かせたいし、甘えさせて笑わせたいと同時に思ったり。

かと言って優しくしてやったら泣くわで複雑な心境ではある模様。

ハリーは彼女の精神的な歪みっぷりと病みっぷりには気づいていない。

気難しくて神経質なところはあるものの強い人間だと思っている。

ただ、時折見せるうつろな表情は気遣わしく思っている。

こんな三人組のトライアングル。

もしかしたら二人ぐらい混じるかもしれない。

次回も頑張ります。

二十五話　一人の願い（前書き）

ハリーと色々あった後、ハリーの誤解は解けたけど、その後、売り言葉に買い言葉で言わずまいとおもってた事を言っちゃったよって話。

二十五話　一人の願い

言うつもりがなかった事だった。
傍にお互いが居る事を許しあった人間だ。
それなのに、どこまでも犯しがたい一線を持った女にどうしようもなく苛立った。
どうやってでも隠そうとしている淀みのようなものだと知っていたのに。
触れてほしくない傷跡だと分かっていたのに。
この日に限っては、我慢がきかなかった。

思わず言葉が零れ落ちた。

色の白い、硬質に整った彫刻の様な顔が分かりにくくひきつる。
蒼氷色（アイスブルー）の瞳が何時もよりも、さらに凍てついたような淡い色合いに変わる。
知らない人間なら気付かない様な、本当に些細で微かな変化。
ピクリと手袋から覗かせた指が動く。
俺に気付かないまま、形のいい唇が言葉を発した。

「・・・何が？」

普段なら普通に見えたであろう光景も先ほどの揺らぎっぷりを見れば嘘だと分かる。
本当に本当に、僅かな差異。
細い手首を握り締めるように掴むと、本当は体重が少なく厚さが薄い肩がびくりと僅かに震えた。
けぶる様な色素の薄い、長い睫毛がふるりと震える。

蒼の双眸の硬質な輝きがゆらゆらと、ゆらゆらと揺らぐ。
それにぞわりと神経が逆なでされたので、
襟を掴んで、思い切り壁に体を押し付けてみた。

ダンと、乾いた音がする。
自分でもどうやら思っていた以上に苛立ちを覚えていたらしい。
壁に自身の体躯をたたきつけられた形になるギルが僅かに苦い表情を見せた。
けれど、何も言わなかった。

その、何でもないと思いこもうとしてる。
いつもと変わらない癖に、泣きそうな顔が、むかつくんだぁ。
泣きたいのを自覚をしてなくて、
我慢を我慢と知らなくて、
助けの求め方も知らないで、
いつの間にか全部諦める事を覚えて、
自分の我儘を言う方法を、伝え方も、求め方も忘れてしまった。
自分にとってはそれが普通なのだと思ってしまったのだろうか。
もし、そうならそれは、どうしようもなく――――。

「・・・なあ、本当に分かってないのかよ」

さびしい、ものじゃないだろうか。

壁に押し付けられてるのに、驚愕に包まれたからだろうか。
俺の言葉が、心底分からないと理解できないとでも言うように、
きょとりとした目で見つめられる。

その真っ直ぐさが痛々しいとしか思えなかった。
自分がもうこれ以上傷つかない様に心に防衛線を引く。
隠しているうちに、自分が最初からこうも歪んでいたと思いこむ。
そうした方が、疲れないから。
それが当たり前だと思っている女に泣きそうになった。

だってお前は、俺と違った筈なのに。
大事な両親がいたと、大切な人がいたと、語っていた眼差しは優しかった。
だから、それを当たり前だと思える位、優しい家庭に居れた人間だと思ってた。
誰が、なくしてしまうと思うだろうか。
あいつにとってはささやかながらも大切なものだったはずなのに。
それなのに、そんな事も言えなくて、言えなくなって。
俺のように最初から与えられない存在で無く。
与えられていたものを全て、奪われて。
耐える事しか知らなくて。
長い間、耐える事しか出来なくなって。
誰にも、頼れなくて。
残された唯一の矜持を保つために叫ぶのもやめて。
我慢して、我慢して、我慢して、黙って耐え続けて。
その挙句に存在さえ、忘れてしまったなら
俺は――――それはとても寂しい女だと思う。

「助けてくれって言えよ」

頼むから、と呻くように言って首元に顔を埋めた。
今は顔を見たくない。
見られたくない。

動揺をしているのは分かる。
だけど、放っておいた。
言うつもりのなかった言葉は俺の本気の本音だったからだ。

一言で、いい。
お前が俺をどうでもいいと思っていないのなら、一言でもいいから。
助けてくれと言ってくれ。
そうしたら、俺は、お前の事を絶対に助けるから。
絶対において行かないから。
お前を傷つけた奴みたいに途中で、手を離さないから。

何からでも守って、みせるから。

自分で思った事とはいえ、今までとは違う自分を自覚して、自嘲する。
ぎゅうと抱き寄せた体は、華奢で。
掴んだ手首は簡単に折れそうなくらい細くて。
その人間の心の傷つきっぷりを知っているから、
俺は――――ただ、黙って細すぎる体を抱きしめた。

二十五話　一人の願い（後書き）

次回も頑張ります。

二十六話　不器用な女と素直じゃない男（前書き）

＊注意＊
この話の中にはちょっとエロイというか、気をつけなきゃいけない個所があります。それでもいいって方はどうぞ。

まだ、引き返せますよ？

二十六話　不器用な女と素直じゃない男

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

「ッ…、や、だ」

喉から、絞り出すように出した声は我ながらあきれるぐらいに泣きそうな声だった。
のしかかってくる男の頭を押しのけようとする。
自分の手が半ば縋るように染色されて毛先が痛んでいる、
金と黒の混じったピンクの髪をぎゅっとつかんだ。
くしゃりと手元で音が鳴る。

上手く手にも、指にも力が入らない。
だから、頭に乗っけているだけの形だがなりふり構っていられない。

熱くて、辛くて、正直にいえばわけが分からない。
言葉も言葉にならなくて、ただ声と吐息だけが音になる。
喉がひきつったように感じた。

指に触れられるたびに、体が熱くなって、頭が回らなくなる。
目の前が白く染まるような感覚に襲われても、
それがこいつが原因だと分かっているけど。
それでも、それに縋るしか無くて、震える指に力を籠めた。

自分を追い詰めてる奴に縋るなんてどうかしてる。
――――沸騰してわけが分からない頭にそんな冷静な声が過った。

「止めろ・・・！」

あらわすのなら懇願とでも、言うのだろうか。
ぼろりと涙が零れ落ちた。
ぼろぼろと、雫は制限なく頬を伝って。
辛うじてまだ身につけている肌着に吸い込まれていく。

「優しく、すんなボケぇぇ・・・」

どうせ、嘘なくせに・・・！
顔を隠そうとザギの頭においていた腕を持ち上げる。
それなのに、ガシッと手首を掴まれて、阻まれた。
宥めるように口付けられる。
額に、頬に、唇に、瞼に、宥めるような掠めるように落とされる。

それは、優しくて。
――――とても、優しくて。
何故だろう。
此処に居てもいいと言われている様で、ぼろぼろと涙が止まらない。

「も、やだぁ・・・はなし、て」

「うっせえ、黙れ」

「ッ！」

ガブリと鎖骨の上あたりに噛み付かれた。
食い千切られるかもしれないという恐ろしさに体が浮かび上がる。
ツゥと冷汗が背筋に流れた。
思わず、抑えられてない腕で逸らそうとしたら、犬歯が鎖骨の上に。

「なッ・・・やめ、ゃ――――」

ぐちゃりと生々しい音と鈍痛が耳に響く。
視線を下に向ければ、流れ落ちる血。
そして、体を這いまわる痛み。
べろんと真っ赤な舌が見せつけるように流れ落ちた血を舐めた。
それに背筋にゾクゾクするような何かが起きる。

いつの間にか手は縋るように目の前の諸悪（ザギ）の根源の背中に回っていた。
まあかな瞳がさも愉快そうに笑う。
ぼやけた視界の中で、せめてもの仕返しに背中に爪を立てる。

「この、けだもの・・・」

そうやって言い返せば、それに眼だけで愉快そうに笑う。
噛み付くように口付けられて、口の中に鉄臭い血の味が広がる。
呼吸が上手く出来なくて噎せる。
思わず、睨みつけた。
それにザギは、うるせぇと吐き捨てて

「――――黙って、俺に　　ろ」

告白するみたいにそう囁いて。
突然の言葉に困惑する私にもう一度、口付けをくれた。

ＳＩＤＥ：ザギ

俺の横で死んだように眠る女の目元は赤い。
色の白い肌だからか、いっそ異様なまでに赤が映え、
その様子は雪に血を落としたかのように感じられる。
呼吸は浅く、その音が聞こえなければまるで死体の様だ。

そんな事をふと思いながら手を伸ばす。
白すぎる肌は、滑らかで指が滑る様だ。さわり心地もいい。
スッと指を這わせて、固く閉ざされた瞼に浮かぶ涙を指で掬った。

「うっ・・・」

小さな呻き声が聞こえて、起こしたかと思ったが目の前の女は起きていない。
それに安堵して、僅かにため息を漏らした。

若干の湿り気を帯びた、銀の髪を梳く。
こんな状態でも銀の髪は、僅かの引っかかりもなく綺麗なままだった。
人を絡め取る青の双眸は瞼に閉ざされて見る事が出来ない。

ほっそりとした首筋や、くっきりとした鎖骨には多くの。
上背はある癖に痩身で華奢な体躯のあちこちに赤い花の様な痕や噛み痕があり、
自分で付けたものとはいえ、僅かに後悔の念が上がった。
いくら凶暴な自分で限界を知っていても箍がはじけ飛ぶとこうまでなるのか。
生々しい痕に眉を寄せた。

これ以上に悲惨な女は見た事がある。
その時、自分はその女をどうもしなかったし、助けようとも思わな

かった。
その事に関してはまったく罪悪感を感じていない。
しかし、自分でした事とはいえ、この寝顔を見ると罪悪感が湧くのは何故だろうか。

真っ白い滑らかな肌に赤が散り、噛み痕さえもある。
俺が力を込めたせいだからだろうか、手首も紅い線がぐるりと回っている。
そして、衰弱しきったかのように顔色は蝋のように白くなり、呼吸は浅い。

「悪ぃな」

髪を梳きながら、ぼそりと呟いた。
聞いていないと知っていたし、分かってもいたけど。
そう、呟かざるを得なかった。

「――――優しくしてやれなくて」

優しくしてやりたかった。
だけど、俺は、その方法がよく分からない。
自嘲するように吐き捨てた。

俺の横で眠る女は泣いた。
透明な雫を瞳からぽろぽろこぼして、声を出して泣いた。
同居人として一緒に暮らしててもあまり表情を変えずに、
感情を封じ込めていたような奴だったのでひどく驚いた。
それでも、この女の感情を引きずり出したという薄暗い感情がわき出たことは否定すまい。

この女はとことん不器用なのだ。
俺があきれ返るくらいには自覚すらしてないとてつもない不器用だ。
自覚なしの方が手に余るとは納得の言葉だと俺は思う。
我慢して我慢して、それが普通なんだと思いこんで。
手ののばし方も忘れて、人恋しいくせに怖がりで、真っ直ぐなくせに捻くれて。
助けての一言さえ、言えなくなった女。

その女が、初めて泣いた。「優しくするな」と吐き捨てた女が泣いた。
追いつめられないと自身が封じ込めた感情が出せないのかと、
少し、哀れだと思った。

だから、誰に何と言われようとも。
俺がこの女に向ける感情は恋とか愛とは違う。
こんなどろどろとした感情は、違う。
恋というには重すぎて。
愛というには暗すぎる。
そんなの、

「――言えるかよ」

認めてたまるか、こんなもの。
震えるような声には気づかないふりをした。
そうして、俺は瞼を閉じた。

二十六話　不器用な女と素直じゃない男（後書き）

二人ともぐるぐると思考が空回りして、すれ違ってるんですね。
しかも、追い詰めないと縋ってくれないし、縋れない。
そして、ギルは愛とかから逃げる女ですがザギはそれを愛だとは認めない男です。
こいつら、上手く行くんでしょうか・・・。

次回はレイヴンとかハリーとか場合によってはデュークとか出したいです。

次回も頑張ります

二十七話　ハリーの災難

ＳＩＤＥ：ギルベルティーナ

死にたい気分だ。
心なしか、精神的に鈍痛がする。
頭が痛い。体の節々も、特に腰も痛いけど。
顔色も今はすさまじく悪い気がする。
血の気の失せて青白くなっている。そんな予感がする。

そんな事、頓着なしに時は過ぎるので見事な朝である。
いや、永遠の黄昏の町だから夜以外は全部見事な夕焼けなわけだけども。
細かい事は気にしていられない。

風呂に入りたい。熱いシャワー浴びて、髪も洗いたい。
温かな朝ご飯だって食べたいし、コーヒーだって飲みたい。
シーツも洗って、服も着替えなければ・・・。

それに、仕事だ。ギルド内での経理担当（未だに何故、この人事が通ったのかが分からない・・・）なのだ。
これほど、長期休暇が認められたのも奇跡に近い。

「いない事が救いか・・・？」

この家には今、ザギが居ない。
朝起きたら、もうすでにいなかった。
さもありなん。

常日頃から朝はいなかった事の方が多いんだから、今居られた方がどうしたらいいか悩む。
さすがに、私もなぁ・・・・

「昨日の今日で普通に接するのは無理」

うん。無理だ無理。不可能だよ、こん畜生！！
軽く目眩がした。
とんでもない醜態をさらしたと思う。
おぼろげにしか記憶が残っていないけれど。

だって、泣いたし、未だに目蓋、重いし。
目元にタオルが乗っけってあったからザギがどうにかしてくれたんだろう。
余計に、会えなくなったような気がする。
自分の昨夜の様子を思い出しながら、震える足を叱咤して、シャワーを浴びに風呂場にはいる。
思いだすだけで死にそうな気分になったんだけど、
その思考は鏡で自分の姿を見て一旦停止した。

「――――うわぁお」

浴場の鏡を見て、絶句する。
ひざから崩れ落ちそうになった、やっぱりなかった事にしたい。
むしろ、全部、おぼろげながらに覚えているから悪いのか・・・・。

赤い痕と手ひどく噛み付かれた歯型の噛み痕が首や鎖骨を中心にあちこちに散らばってる。
ひどい有様だ。最低限の手当てはしてくれたみたいだけど、酷い。
完璧に犯罪にあった被害者な女性みたいになっている。

やばい、死にたい。
優しくすんなとは私が言った言葉だが、それを言ったあたりから記憶があまりはっきりとしない。
思いだそうとすると、寒気と割れるような鈍痛が起こる。
思いだすな、と。
私の中の何かが告げている。
思いだしてしまえば、取り返しがつかないと。
警報が鳴る。

それに思い出してみると広い背中に無我夢中でしがみ付いて、何やら小恥ずかしいことを訳もわからず叫んだような気さえもする。
というか、私が叫ぶなんて信じられないし、しっかりとした確証が持てない。
・・・やっぱろ、死にたい気分だ。

僅かに上気した頬に気付かぬふりをして、シャワーのコルクをひねった。
水でも浴びないと、やってられない。
熱くて、とろけてしまいそうだ。

ＳＩＤＥ：ハリー

ハイネックの黒にベージュのスラックス。
上着に丈の長い落ち着いた色合いのジャケットを着た銀髪の男装の女は、
コーヒーを飲みながら、書類の確認をしていた。
久しぶりに見る顔はなんとなく血色が悪いように感じて、

思わず目を瞬かせた。
相変わらず、白い肌はこころなしかいつもよりも青白く感じられるし、
透き通っている青の双眸もこころなしかぼんやりとしている。
僅かに癖のある美しい銀の髪もへたりとしているように見えるのは俺の気のせいだろうか。

「ギル」

「なんだよ、ハリー」

こちらを見据えてくる瞳は真っ直ぐで、前とは違う光りが加わっていた。
前までの真っ直ぐで硬質だが脆く見えたものよりも落ち着いた色合いになっている。
本当にこの休みの間に何があったのだろうかと首をかしげる。
ギルはそれに怪訝そうな顔をした。
それでも、綺麗だと思えるのだから美形（いや、本当は女だから美人か？）は得だとつくづく思う。
俺ら以外に誰もいないのを確認した後、聞きたい事について尋ねた。

「・・・なぁ、あれから、なんかあったのか？」

俺の言葉に目を瞬かせ、蒼白だった僅かに頬に赤みがさした。
視線が微かに逸らされ、真っ直ぐな目が揺らいだ。
え、ちょっと待て。お前ほんとになにがあったんだよ？
長い睫毛が伏せられて影を作る。
ふるりと睫毛が震えて、

「――――何も、ない」

ようやく耳に届いたのは震えるくらいに小さな言葉。
えええぇぇぇ！？その顔と声でそういうか！？
なんかありましたと大声で宣伝しているもんじゃねえの！？

思わず、問いただそうと声を荒げようとした。
その時、バタンと大きな音を立ててドアが開いた。
二人して思わず、そちらを向く。
そこには紫の羽織を着た、緑の目の男が居た。

「レイヴンさん、」

ギルが驚いたような顔をする。
仕事でまだ、帰ってこないと報告をされてたからだろう。
俺もちょっとびっくりした。

「ギルちゃんにハリー」

良かったと笑う男を見て、こいつギルの事気付いてるんじゃねーかと思う事があるのだが、今はいい。
人懐っこそうな顔のまま、ギルに書類を差し出した。

「ギルちゃん。これ、領収書ね。ハリーこれ、報告書」

しっかりと受け取って立ったまま目を通し始めるギルをよそに俺は声を上げた。

「レイヴン、速いな。なんかあったのか？」

「ちょ～とつてが使えたからねｖ」

「ハートマーク付けるなうっとおしい」

けっとばかしに行ってみると酷っと言われた。

知るか、道化るな馬鹿。

そんな馬鹿な会話をしている俺らをしり目にギルがパラパラとめくっていた書類を整えた。

「見た限りの不備はないから、申請しときます」

書類にハンコを押して、レイヴンに手渡した。

「ありがと、ギルちゃん。あと、耳の後ろのそれ、隠しといたほうがいいわよ」

「「え？」」

じゃあね～とぬかし去っていくレイヴンの後ろ姿を視界におさめながら、

俺はギルの耳の後ろあたりに紅い痕があるのを発見し、

ギルはぱっと顔を真っ赤にして、耳の後ろを隠して、ダッシュで逃亡した。

えっと、それはつまりそういうことですか。

二十八話　その頃のザギ（前書き）

この小説の中での設定はあくまで捏造です。
ご了承ください。

二十八話　その頃のザギ

あいつが昨夜のピロートークとやらで、家族の事で泣いた。
異様にそれが記憶に残って、自分の家族を思い出した。

軽く家庭崩壊が起こっていたと思う。
父親は嫌いというか、2，3回しか会った事がなかったし、
母親は俺が三つくらいの時に殺された為に思い出すことは少なかったが、
面倒を見てくれた爺がいたのは覚えてた。
多分、俺が家族というのであれば、それはあの爺だけだろう。
俺に剣だの体術だの生きる術を叩き込んだ奴だ。
一回も勝てないまま、病気で死んだ。
勝ち逃げをされたような形で終わった。

だが、俺に家族らしい事をしてくれたのはあれだけだ。
まったく血が繋がっていない赤の他人だったが・・・。

そもそも俺は父親の家系譲りの自分の髪色が嫌いだった。
父親は別にどうとも思っていなかったのだが、周りが酷く騒いだから。
先祖がえりなのか桃色に近い金の髪は、嫌でも父親の面影が現れる。
うっすらとしか覚えていない母親は白い髪だったのに。
その色合いは自分には毛ほども受け継がれていない。

だからか、ギルの髪の色は好きだった。
自分の色とは違って優しい色合いで、綺麗で、純粋に美しいと思っ

た。
髪質も滑らかで柔らかいのが心地よく、自分の固い髪とは大違いだと思った。

瞳の色は嫌いじゃなかった。
母親と同じ色だったからか、嫌いにはなれなかった。
別に好きなわけでもなかったし、この色のせいで苦労もしたけど。
嫌いにはなれなかった。

父の正妻には血の様な色だとよく罵られたが嫌いにはなれなかった。
あの女は俺と母親の事が嫌いだったようだった。
その顔すら良く覚えていないけど、そうだったように思う。
あのでかい家から逃れた後も、この目は血の様だとさえずられた。
疎まれた。
最初は、何故だろうと思っていた。
だけれど、歳を重ねるごとに慣れていった。
――――筈だった。

「（あいつが、ああいうからだ）」

あいつが、ギルが、ギルベルティーナが俺の瞳の色を綺麗だというから。
あの青い目で真っ直ぐこちらを見つめて、綺麗だと綻ばせるから。
柘榴か、紅玉（ルビー）のような色合いだと、褒めるから。
ふと、この色で良かったと思った。

別にどうとも思っていないようなものだったのに。
あいつに褒められた時に、うれしかった。
自分でも柄じゃねえと思うが、あの女に褒められて何かが温かくなったのだ。

「（ああも笑うから、調子が狂う）」

頭に浮かんだ、笑顔。
白い肌が淡い桃色に染まり、はにかむように微笑む姿。

そうだ、あの女は、とても綺麗に笑える女なのだ。

いつもは、どこか諦めたようにしか笑えないのに。
家族の話をする時、その時だけは、酷く綺麗に笑う。
自分のたからものなのだとでもいうように美しく笑う。
あの女が本当に心の奥にしまいこんでいる大切なものなのだ。

思い返すだけで、腹立たしい。
あの女は、俺の為にはあの笑顔で笑ってはくれない。
そりゃ、俺はあの女のうちにはいるようではある。
だけどあの女の一番ではない。

それを思い出して、自分らしくない事に思わず舌打ちをしたら、
同僚（同じギルドの一員）が後ずさった。
お前にはキレてねえし、お前にそんな感情は向けねえよ、めんどくせぇな。

いらいらとしながら、報告に向かう。
服からはむせかえる様な血の匂いがして。
それと同じ位に、黒く酸化した血が服や剣、髪にこびりついている。
もう慣れた香りだが、あの女はコレのまま抱きついたら嫌がるだろう。
別に俺が嫌いなわけではなく、俺の匂いがしないから嫌なのだと聞きだしたが。

あの女にこの誰のものとも知れない人間(モノ)の匂いが付くのは気に食わない。
なら、面倒だが、どこか娼館にでも行って昂りを納めがてら、
さっぱりしてから行くのがいいだろう。
今の俺はあの女を抱き殺しかねない。

「それは、ごめんだな・・・」

俺は、あいつと違って家族を知らない。
父親を知らず、母親もあまり知らない。
ただ、名前だけは覚えている。
母親はマリア・クロイツウェーグという名前だった。
父親は、正直思い出したくない。
そして俺の長い名前は、ザギシュベルガ・アロイス・ヒュラッセインという。

自分の名前は嫌だから捨てたし、まず俺は死んだ事になっているから名乗るつもりはない。
爺にも名前を捨てろと言われた。
だから、俺はザギなのだ。

そこまで考えた所で、報告をする為にドアを開いた。

二十八話　その頃のザギ（後書き）

何故、ザギがこうなったのかについて。
ＰＳ３版の隠しダンジョンにある「十六夜の幽虚街」にて「ザギは満月の子の末裔かもしれない」というスキットが存在します。
十六夜の幽虚街にいる満月の子の末裔の髪の色がザギみたいなグラデーションのため。スキットでも言及されています。
公式シナリオブックのスタッフへのＱ＆ａｍｐ；Ａでは「彼はああいう性格なので、単に染めてるんじゃないかと……。」と言われていますが、この小説では所々染めているが本当の色として地毛にしました。
しかも、彼、腕を魔導器に変えるまで魔導器らしきものをつけてないんですよね。
私の気のせいかもしれませんが・・・・。

というわけで、この小説でのザギは皇帝の息子（妾の子供）で満月の子です。

もうちょっと進んだら主人公の特異体質も出しますので・・・・。

次回も頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7677r/

銀の剣士は旅をする

2011年12月15日22時54分発行